

# ロシア所蔵トカラ語文献に関する覚え書き\*

荻原裕敏

キーワード: トカラ語仏典 (根本)説一切有部 《Vessantara-jātaka》

## 要旨

本稿では、これまで十分には知られていなかったロシア所蔵トカラ語文献について、筆者が調査した断片の中から、特に重要なものを紹介する。断片の紹介に際しては、その他のコレクションに含まれる断片をも考慮に入れつつ、トカラ語文献に反映される西域北道の仏教を歴史的に位置づけると共に、トカラ語文献が果たした仏教史上の役割についても概観することを可能にするものを中心とした。本稿で扱われる断片は、筆者によって比定された未出版の断片群であり、《Buddhastotra》・《Udānavarga》・《Udānastotra》・《Vessantara-jātaka》を含む。なお、トカラ語 B 文献中に対応する内容を含むと推定される古代ウイグル語断片一点も扱う。

## 1. ロシア所蔵トカラ語文献概観

新疆ウイグル自治区より将来されたトカラ語文献は、現在ドイツ・フランス・イギリス・ロシア・中国・日本の図書館や美術館等に所蔵されている。これらの内、ドイツ・フランス・イギリス所蔵の断片についてはインターネット上で所蔵断片の殆どの画像が確認可能であるが、ロシア・中国・日本所蔵の断片は、極一部の例外を除き、画像が公開されていないため、実際に現地へ赴き、調査を行う必要がある。幸いにして、筆者はこれらの国々に所蔵されるトカラ語断片を調査する機会を与えられ、未公開資料を調査することができた。筆者は博士論文の資料調査の一環として初めて赴いた 2009 年以降、断続的にロシアを訪れ、ロシア所蔵トカラ語資料の調査を進めてきたが、昨年漸く区切りをつけることができたため、ここで筆者の調査結果を公表することにした。

ロシア所蔵コレクション中のトカラ語断片の概略は、Malzahn (2007: 91-93) で紹介されているように、Berezovsky collection, Krotkov collection, Malov collection, Petrovsky collection, Strelkov collection と大きく五つの collection からなるが<sup>1</sup>、この内 Strelkov collection と Malov collection には木簡のみが知られている。それぞれに含まれる断片の数は前掲 Malzahn 論文

\* 本稿は、JSPS 科研費 17K02724 による成果の一部である。断片の調査にあたっては、ロシア科学アカデミー東洋学研究所 Irina Popova 博士並びに同研究所のスタッフの方々にお世話になった。特に記して、感謝申し上げる。なお、筆者は、博士論文準備中の 2009 年に Pinault 教授よりロシア所蔵トカラ語断片の転写を提供された。また、第 5 節については吉田豊教授(京都大学)に、第 6 節については森安孝夫大阪大学名誉教授より貴重なコメントを頂いた。篤くお礼申し上げる。ただし、本稿で解釈を行った六断片の内、SI 2943-3 及び SI 2962-2 を除く断片については筆者自身の調査によっており、Pinault 教授の転写を参照していない。本稿における記述の責任の一切は、筆者に帰する。

<sup>1</sup> Malzahn 論文は当該論文出版以前のロシア所蔵トカラ語資料を対象とした先行研究も紹介しており、これらについてはここでは繰り返さないが、以下において個別の断片を扱う際、関連する 2007 年以降に出版された研究には言及する。

で与えられており、全体として 190 点近くに及ぶとされているが、筆者の調査によれば、トカラ語 A 及びトカラ語 B を合計して 300 点を超える断片が確認された<sup>2</sup>。また、Malzahn 論文には言及されていないが、壁画に書かれた題記資料も若干存在する<sup>3</sup>。以下では、ロシア所蔵トカラ語文献の内、筆者が比定に成功した断片を扱うが、これらには近年新しい所蔵番号が与えられたため、参照の便宜を考慮し、古い所蔵番号と共に紹介する<sup>4</sup>。

## 2. «Buddhastotra»断片

ロシア所蔵トカラ語文献中、最も状態が良く、また最も良く知られている断片は、トカラ語文献としては最初に公表され、後に«Buddhastotra»に比定された二枚の folio である<sup>5</sup>。これまで指摘されたことはないが、筆者はロシア所蔵トカラ語文献中に新たにもう一点«Buddhastotra»に比定される断片を発見した。当該断片は SI 2943-3 (= SI B 16-9) という所蔵番号を有し、サイズは約横 10.3cm×縦 6.5cm で、紐穴の右側に相当するが、folio の右端は欠落している。文字には古代期の特徴は見られず、<ta><na>は明確に区別されるが、全体的に文字は丁寧とは言えず、書写の際の誤りと見られる箇所も確認される。一方、言語特徴については、古代期トカラ語 B の特徴が部分的に確認される<sup>6</sup>。なお、本断片の発見場所は不明である。

この断片の a1-4 は、現在中国・旅順博物館所蔵に帰しており、TochSprR(B) II: 121 で転写が公表された B204 b1-4 とほぼ同一の内容を示しているだけでなく、詩節の番号も一致していることから、同一の作品の異なる写本に属していた断片と見られる。以下に、文字転写と音素転写を挙げる<sup>7</sup>。

### 2-1. 転写

#### Transliteration

a

1 /// klyomñai akṣāsta : ·[tat]kuweṣ<sup>[1]</sup> nañ<sup>[2]</sup> ·[e] ///

<sup>2</sup> ロシア所蔵資料には多くの零細な断片が含まれており、これらは書かれているブラーフミー文字が判別できる程度のものであるため、言語の特定には至らなかった。従って、ここで提示した数は筆者がトカラ語であると断定できたもの及びトカラ語と推定される断片の数であり、個々の研究者の判断によって総数は変動し得る。なお、木簡については、慶昭蓉博士の調査結果に依拠している。

<sup>3</sup> トカラ語題記が書かれた壁画は、現在エルミタージュ美術館所蔵に帰している。これらの資料については、荻原 (2015a) で体系的に紹介した。

<sup>4</sup> 本稿では主にトカラ語文献に反映される西域北道の仏教の位置付けを目的としたため、紙文書による仏典のみを扱い、木簡等に書かれたものは扱わない。また、ロシア所蔵トカラ語文献に含まれるトカラ語 A 断片は殆どが零細な断片であるため、トカラ語 B のみを対象とする。

<sup>5</sup> 当該の二断片は SI 1903 及び SI 1904 (= SI P/1 及び SI P/2) であり、これまで数人の研究者によって解釈が提示されているが、最も新しいエディションとしては Pinault (2016a, 2016b) を参照。

<sup>6</sup> 古代期トカラ語 B の言語特徴を反映している語形としては *winaskauc*, *špalmeñ*, (*tsä*)*lpare*, *tāñ* が挙げられる。なお、ほぼ同一の内容を持つ、後述の B204 が古代期の言語特徴を示さない点で本断片とは対照的であり、この点は当該作品が古代期の時代からトカラ語 B に受容されていたことを示唆している。

<sup>7</sup> 本稿では、以下の転写方式を使用する。

[ ]: 破損によって読みが不確実な箇所	( ): 筆者によって推定された箇所
·: akṣara の欠けている子音若しくは母音	*, :: 断片中の punctuation
{ }: 破損により推定された欠落部分	=: sandhi
<>: 行間に書かれた追加部分	

2 /// kaş\ posa pernent\ winaskauc\ • 20 7 perne (·)[ñ]· ///

3 /// kasta enkalyñeşşem şanmānma ///

4 /// [y]aikasta aknātsañe orkam[ñ]e ///

5 /// (·)e [št]wer şpalmem emprem (·)[e] ///

b

1 /// lūkalyñenta laitka [r]o - ///

2 /// sknace • yek[t]e yekte perñe - ///

3 /// jarsa şaskāstame snai lyīprā ///

4 /// lpar[e] 30 tāñ perneşşe şūkesa yo ///

5 /// ontsoytñemem tsalpā[r]e • pernerñeşşe {-} - ///

注釈

(1) 同一の詩節を示す B204b1 により、(s)[nqt]kuweş の誤りと見られる。

(2) 同一の詩節を示す B204b1 により、tañ の誤りと見られる。

Transcription

a

1 /// klyomñai akşāsta : (sn)ätkuweş (t)añ (p)e(rnesa) ///

2 /// (tsatsai)kaş posa pernent winaskau-c • 27 perne(r)ñ(esa) ///

3 /// (ai)kasta<sup>[1]</sup> enkalyñeşşem şanmānma<sup>[2]</sup> ///

4 /// yaikasta aknātsañe<sup>[3]</sup> orkamñe ///

5 /// (·)e stwer şpalmem emprem(tsñ)e(nta) ///

b

1 /// lūkalyñenta laitka<sup>[4]</sup> ro - ///

2 /// sknace<sup>[5]</sup> • yekte yekte perñe<sup>[6]</sup> - ///

3 /// jarsa<sup>[7]</sup> şaskāsta-me<sup>[8]</sup> snai lyīprā ///

4 /// (tsä)lpare 30 tāñ perneşşe şūkesa yo ///

5 /// ontsoytñemem tsalpāre • pernerñeşşe {-} - ///

注釈

(1) B204b3 には *ekasta* とあるが、TochSprR(B) II: 121, fn. 15 に指摘されるように *aikasta* が期待される。

(2) B204b3 には *ñemna po* とあり、本文がやや異なる。

(3) B204b4 には *aknātsañeşş = orkamñe* とあり、本文に異同が見られる。

(4) 両者とも初出の語形であるが、トカラ語 B の動詞形態論から *lūkalyñenta* は *litk-* ‘to remove, eliminate’ の現在語幹或いは接続法語幹から派生される抽象名詞 *lūkalyñe\** の複数主格・斜格形に<sup>8</sup>、また *laitka* は同一語根の三人称単数過去能動態の形式と推定される。

ここでは、この二語は *figura etymologica* を形成していると見られる。

<sup>8</sup> 当該語根の現在語幹及び接続法語幹は在証されていないため、トカラ語 B の語形の語幹を確定できない。なお、対応するトカラ語 A の語根は接続法が第五類に属するが、現在語幹は在証されていない。

- (5) 語尾 *ce* から *-ts(ts)e* によって派生される形容詞の男性単数斜格形と考えられるが、既知の語彙からは語幹を推定できない。
- (6) Adams (2013: 545) には *yekte-perne* ‘of little worth or fortune’ とあるが、この部分の読みに問題はなない。なお、前掲 Adams の辞書には記述がないが、*yekte perñe* という語形は本断片だけでなく、B249a2 にも在証されることから、書き誤りではなく、このような語形が存在していたと考える方が妥当と見られる<sup>9</sup>。
- (7) 語尾 *-sa* から名詞の通格形とみられるが、既知の語彙からは語幹を推定できない。
- (8) この語形は初出であるが、トカラ語 B の動詞形態論から *käsk-* ‘to scatter/strike apart, scatter to destruction’ の使役形過去二人称単数能動態の形式に、代名詞接辞複数形を附した形式と推定される。

## 2-2. 韻文の復元

前節で言及したように、本断片は転写が既に公表されている B204 b1-4 と内容がほぼ一致しているため、重複部分については韻文を復元することが可能である。また、B204 の韻律から、重複部分を持たない箇所もある程度復元し得る。B204 は 4 行×14 音節という韻律を採っており、一詩節は各 14 音節を有する四つの *pāda* から形成され、各 *pāda* は 7 音節より成る二つの *colon* に区切られる。B204 との比較から、本断片は第 27 詩節 *pāda b* から第 31 詩節 *pāda c* に相当すると推定される。以下、B204 との対応を示す。

### 第 27 詩節

#### Pāda a

B204a4: *pernerñenta aiṣṣeñcai | traidhātuk po saṃsārṣsets |*

#### Pāda b

B204a4-b1: *ceclu ṣar kauc permento | ytāri klyomñai aksasto |*

SI 2943-3a1: {- - - - - - - | - -} *klyomñai akṣāsta |*

#### Pāda c

B204b1: *snātkūweṣ tañ pernesa | indrinta ślek kektseñe |*

SI 2943-3a1: (sn)ātkuweṣ (t)añ (p)e(rnesa) | {- - - - - - -} |

#### Pāda d

B204b1-2: *pernerñesa tsatsaikaṣ | posa pernent wināskau-c || //27//*

SI 2943-3a2: {- - - -} (tsatsai)kaṣ | posa pernent winaskau-c || //27//

### 第 28 詩節

#### Pāda a

B204b2: *pernerñesa wyāksasta | tsārśalñenta lāklessem |*

SI 2943-3a2: *perne(r)ñ(esa) {- - - | - - - - - - -} |*

#### Pāda b

<sup>9</sup> ロシア所蔵トカラ語 B 断片 SI 2994-8 (= SI B 113) (a)3 には、*y[a]kte pe(r)[ñe]* という語形も見られる。

B204b3: *pernerñesa ekasta | enkalñeşsem ñemnai po |*

SI 2943-3a3: {- - - -} (ai)kasta | enkalyñeşsem sänmänma |

Päda c

B204b3-4: *pernerñeşse āgatstsa | sönaişse wse nekasta |*

SI 2943-3: {- - - - - - - - | - - - - - - - -} |

Päda d

B204b4: *pernerñesa yaikasta | aknātsamñeşş = orkamñe || //28//*

SI 2943-3a4: {- - - -} yaikasta | aknātsañe orkamñe || //28//

第 29 詩節

Päda a

B204b4: *pernerñesa makāntso | yātä(şşatai)*

SI 2943-3: {- - - - - - - - | - - - - - - - -} |

Päda b

SI 2943-3a5: {- - - - - - - -} (·)e | stwer şpalmem emprem(tsñ)e(nta) |

Päda c

SI 2943-3: {- - - - - - - - | - - - - - - - -} |

Päda d

SI 2943-3b1: {-} lĩkalyñenta laitka | ro - {- - - - -} || //29//

第 30 詩節

{- - - - - - - - | - - - - -} sknace |

yekte yekte perñe - | {- - - - - - - -} |

{-} jarsa şaskāsta-me | snai lyĩprä {- - - -} |

{- - - - - - - - | - - - -} (tsä)lpāre || //30//

第 31 詩節

tāñ perneşşe şūkesa | yo {- - - - - -} |

{- - - - - - - -} | ontsoytñemem tsälpāre |

pernerñeşşe - {- - | - - - - - - - -} |

{- - - - - - - - | - - - - - - - -} || //31//

以上の対比が示すように、B204 と SI 2943-3 は内容が殆ど一致しているが、動詞の時制や語彙の選択において差異も認められる。ただし、これらの差異は、それぞれの断片が反映するトカラ語 B の言語特徴の段階の相違や同一の概念を異なる語で表現したものと考えられ、根本的な相違とは言えず、同一作品の異本に位置付けられる。なお、同一作品に属するその他の断片も含め、この二断片の差異については荻原 (forthc.) で体系的に扱ったため、本稿では繰り返さない。

### 3. «Udānavarga»断片

ロシア所蔵トカラ語文献中には、サンスクリット・トカラ語 B による《*Udānavarga*》のパ  
イリンガルの断片が複数存在しており、Lévi (1933: 39-56) では八点の断片が出版されてい  
る<sup>10</sup>。筆者は、この他にも同種の断片が存在することを確認しており、本節では筆者が比定  
し得た断片を紹介する<sup>11</sup>。

SI 6375-3 (= SI B 134 (3)) は発見場所不明の断片であり、サイズは約横5.6cm×縦4.6cmで、  
紐穴の形跡は見られず、文字には古代期の特徴や後期の特徴も確認されないが、残存部分  
が限られており、言語特徴を確定し得ない。なお、本断片は Udv.V.24b-27c に比定される。

### Transliteration

a

- 1 */// - [n] m p ///*
- 2 */// mpr[em] weṣṣeñcai • [du] ///*
- 3 */// [ku]rute priyam\ ///*
- 4 */// [l](·) {-} (·)e ///*

b

- 1 */// pā [ā]ly ///*
- 2 */// - (·)[t] bhavati tu pri - ///*
- 3 */// ñc[u] • nānā yān[t]i ///*
- 4 */// - ṣpā nrain[e] ///*
- 5 */// (·)[l](·) - ///*

### Transcription

a

- 1 */// - n m p ///*
- 2 */// (e)mpreṃ weṣṣeñcai • du ///*
- 3 */// kurute priyam ///*
- 4 */// l(·) {-} (·)e ///*

b

- 1 */// (s)pā āly(itrā) ///*
- 2 */// (sa)t(ām) bhavati tu pri(yah) ///*
- 3 */// ñcu • nānā yānti ///*
- 4 */// - ṣpā nraine ///*
- 5 */// (·)l(·) - ///*

### 注釈

- a1: サンスクリット部分と考えられるが、現在知られている本文とは一致せず、対応箇所を  
明らかにすることができない。
- a2: Udv.V.24bに見られる Skt. *satya-vādin-* ‘speaking the truth, truthful’の単数対格形に対応する  
が、後続する箇所は現在知られている Udv.とは一致しない。
- a3: Udv.V.24d に対応する。
- a4: 残存状況が悪く、対応箇所を確定できない。
- b1: 残存状況が悪いが、Skt. *ca* ‘and’に対応する Toch.B *spā* ‘and’及び Skt. *ni-ṣr-* ‘to hold back  
from’の願望法三人称単数能動態 *nivārayet* に対応する *āl-* ‘to keep away, restrain’の願望法三  
人称単数中動態の形式である *ālyitrā* が推定される。なお、この箇所は Peyrot (2008a: 92-93)

<sup>10</sup> Lévi によるエディションは、読み誤りや転写方式の相違からそのままでは利用できず、原文書の調査が  
必要とされていたが、Lévi が出版した八点の断片については、現在の所蔵番号と共に Ogihara (2015) で原  
文書調査に基づいた新しいエディションを提示した。なお、八点の内訳は、同書中の U(7), (13), (15)-(18), (20),  
(23)である。

<sup>11</sup> 本節で紹介する断片の他、SI 2985-1 (= SI B 75) が Udv.I.26b-34a に、また SI 2994-9 (= SI B 114) が  
Udv.IV.23c-34c に比定され、CEToM の当該断片の項目に転写及び文献学的解釈が公開されている。筆者は、  
謝辞で言及した Pinault 教授提供のロシア所蔵トカラ語断片の転写に記された注記から、この二断片の比定  
を知り得た。

で扱われている、同じくサンスクリット・トカラ語 B の《*Udānavarga*》断片であるイギリス所蔵断片 IOL Toch 560b2 に対応箇所が見られ、Skt. *nivārayet* に対応するトカラ語 B の形式として *alyitrā* を推定しているが、注釈中では語頭の母音は<ā>の可能性が高いとしており、SI 6375-3 の当該箇所はこの推定を裏付けると言える。

b2: Udv.V.26b に対応する。

b3: Udv.V.27a-b に対応するが、*ñcu* については正確なトカラ語 B の語形を推定できない。現在知られているサンスクリット本文とは、異なる内容を有していた可能性がある。

b4: Udv.V.27c に対応し、Toch.B *nraine* が Skt. *naraka-* ‘hell’ の単数対格形に対応することは明らかだが、先行する Toch.B *spā* ‘and’ は通常 Skt. *ca* ‘and’ に対応し、ここでもこの対応が期待されるが、現在知られている本文とは一致しない。

b5: 残存状況が悪く、対応箇所を確定できない。

対応<sup>12</sup>

*dharmasthaṃ śīlasampannaṃ hrīmantam śatyavādinam |*  
*ātmanah kāraṇam santaṃ taṃ janaḥ kurute priyam || //V.24 //*  
*pareṣāṃ ca priyo bhavati hy ātmārtham kriyate 'pi ca |*  
*dr̥ṣṭe ca dharme prāśamsyah sāmparāye ca sadgatih || //V.25//*  
*avavadetānuśāsita cāsabhyāc ca nivārayet |*  
*asatām na priyo bhavati satām bhavati tu priyah || //V.26//*  
*asantaś caiva santaś ca nūnā yānti tv itaś cyutāḥ |*  
*asanto narakam yānti santaḥ svargaparāyanāḥ || //V.27//*

本節で紹介した断片は Udv.V.24b-27c に比定されるが、a1-2 及び b3-4 は現在知られている本文とは一致せず、本断片に基づいた原典は既知のものとは異なる本文を有していたと考えられ、《*Udānavarga*》の歴史的発展を研究する上で重要な手がかりを提供する。

#### 4. 《*Udānastotra*》断片

トカラ語文献学において《*Udānastotra*》と称される文献は、その殆どがフランスに所蔵されており、Lévi (1933: 57-71) がイギリス及びロシア所蔵の断片も参照して出版した<sup>13</sup>。その後、ロシア所蔵断片を除くイギリス所蔵及びフランス所蔵断片の殆どが Thomas (1966) によって再度解読され、Pinault (1990) によって《*Udānastotra*》の全体が復元された。ロシア所蔵トカラ語文献中、Lévi は三点の断片の存在を把握していたと考えられ、それらは前掲書籍の《*Udānastotra*》部分に含まれる S(1), S(6)及びコロフォンに相当する<sup>14</sup>。筆者は Lévi が指摘していない《*Udānastotra*》断片を、さらに一点比定することができた。

<sup>12</sup> サンスクリット本文は Bernhard (1965: 146-147) より引用し、断片中のサンスクリット部分は太字で、トカラ語 B による訳語部分は点線で示している。なお、これらの詩節の英訳は Hahn (2007: 32) を参照。

<sup>13</sup> 《*Udānastotra*》に比定される断片のリストが Peyrot (2016: 309) に掲げられており、対応箇所も含めて一覧可能である。

<sup>14</sup> これら三点の所蔵番号は、SI 2942-4 (= SI B 16 (4)), SI 2997-8 (= SI B 128 (1)), SI 2921-7 (= SI B 3 (6))である。

SI 2997-2 (= SI B 124) は発見場所不明の断片であり、サイズは約横 8.7cm×縦 8.7cm で、紐穴の左側に相当するが、folio の左端を残しておらず、folio の番号は不明である。文字には古代期の特徴や後期の特徴は確認されない。当該断片は、Pinault (1990) によって復元された《Udānastotra》の 24b-28b に対応箇所が見られるが、一部本文に異同があった可能性が指摘される。以下、転写と《Udānastotra》との対応を示す<sup>15</sup>。

Transliteration

a	b
1 /// - k <sub>∇</sub> pa (·)[i] ///	1 /// ne : aiśamñeṣṣe sār[r]· ///
2 /// (·)[k]· śkeṃ rano O ///	2 /// ·[sk]· trī kn[e 20] <sup>[1]</sup> O ///
3 /// [r]·(·)[e p]yāpyai O ///	3 /// - ñiś\ O ///
4 /// [y]· toṣ tā O ///	4 /// [su] prākṛe tā O ///
5 /// (·)[ai]kañesa aśvavā[rg]\ ///	5 /// [l](·)aikn[e]ṣṣe ke - ///

注釈

(1) この箇所の読みは不確実だが、或いは<sa>と読み得るかも知れない。なお、<20>の読みが正しければ、対応から考えて、第 26 詩節の末尾と見られる。

Transcription

a	b
1 /// (= ā)k pa(ṣṣ)i(mar) ///	1 /// (cmela)ne : aiśamñeṣṣe sār(athim) ///
2 /// (ly)k(a)śkeṃ rano O ///	2 /// ·sk· trī kne [20] O ///
3 /// (cāñca)r(ñ)e pyāpyai O ///	3 /// - ñiś O ///
4 /// y(ai)toṣ tā- O (koṃ) ///	4 /// su prākṛe tā- O (koy-ñ) ///
5 /// (p)aikañesa aśvavārg ///	5 /// (pe)laikneṣṣe ke(rū) ///

注釈

a1: 24b に対応するが、本断片に在証される動詞形 pa(ṣṣ)i(mar)の母音は、PK NS27b2 の paṣṣīm(ar)と異なり、短母音<i>となっている。

a2: 24d に対応する。

a3: 25a に対応するが、PK NS27b4 の pyapyaim とは異なり、ここでは pyāpyai となっており、複数斜格形ではなく、単数斜格形を示している。なお、同様の語形は、本断片と同じ詩節に対応する本文を持つ B313a2 及び PK AS 5Ba2 にも在証される。

a4: 25c に対応する。

a5: 26a に対応する

b1: 26b-c に対応する。

b2: 筆者の読みが正しければ、26d 末尾に対応するが、既知の断片中には本断片との対応箇所が見出されず、異なった本文を与えていた可能性がある。

b3: 27b に対応する。

<sup>15</sup> 本断片に対応する詩節を含む断片として、フランス所蔵断片 PK AS 5B, PK NS 27 及びドイツ所蔵断片 B313 が知られている。



b4: 27d に対応する。

b5: 28b に対応する。

対応<sup>16</sup>

*paikalñesa „dakavārg po ekšalyim po(yšñana) ---- |*  
*---- (-) ññes = āk paššim(ar) ----- |*  
*(mā) – tse ra krañīwe orotsñesa meñšimar ynauškak skāyoyim |*  
*lykaškem rano yolaiñe po prañkāššim kartsauñes ---- || //24//*  
*(pušpa)vārg(ā) paiykāmai makte kroñšamts cāñcarñe pyāpyai warssi |*  
*tūsa aušap maiyyātstse po krentaunañs tsankoy ñi akālk rmamñe |*  
*šī(la)šš = āstreñ weresa yaitoš tākoñ po wnołmi ce yāmorsa |*  
*sapulempa menāk tā karsoym kektseñ kautātsttsai mā treñcī(mar) || //25//*  
*paikalñesa ašvavārg colañ yakweñ yällošše(m) yātāššimar |*  
*kālšamñeššai maiyyasa kekenu ñiś šek tākoym po cmelane |*  
*aīšamñešše sārathim källoyim špālmeñ anaišai yātāššitārñ |*  
*pelaiknene wātāktse višaintameñ pāmnowo šal(·)e ·ite || //26//*  
*krodhavārgā paiykāmai cwī yāmornstse okosa s = akālk kñūtārñ |*  
*kos špā spārtoym sañsārñ(e) tremi kleś niś emañña mā lkoyentrā |*  
*rekaunaššem širenä(m) kr<sub>u</sub>i ra yepem swāšyeñ tsa ainaki ra |*  
*kālšamñešše niške su prākre tākoyn arañce poš pautarške || //27//*  
*tathāgatawārg pai(kām = aišamyemmpa še) šmīmar ce yāmorsa |*  
*pelaiknešše kerū cai štwer = emprenma newent ce ente pyāšyem |*  
*yneš-poyšintamts koynamem källoy(m klyauštsi okta)ts(ai) klyomñiai ytāri |*  
*ršākemts lānte pešpirttu pelaiknešše cākkār se walke stamoy || //28//*

## 5. «Vessantara-jātaka»断片

トカラ語文献に本生譚や比喻譚に比定される断片が数多く見られる点は、トカラ語文献学では広く知られるところであるが<sup>17</sup>、筆者は新たにロシア所蔵資料中に「*Vessantara-jātaka*」に比定される断片を二点見出した<sup>18</sup>。この二断片は SI 2962-2 (= SI B 27-2) 及び SI 2998-8 (=

<sup>16</sup> ここでは、Pinault (1990: 61-62) に基づき、対応箇所を含む PK AS 5B, PK NS 27, B313 の CEToM の項目を適宜参照し、本文を修正した上で、対応箇所を太字で示している。なお、これらの断片には細かい部分で相違が見られるが、ここでは SI 2997-2 が具体的に「*Udānastotra*」中のどの部分に位置付けられるかを示したに過ぎず、「*Udānastotra*」の再建を試みたものではない。また、SI 2997-2 は残存部分が少なく、かつ「*Udānastotra*」のフランス語訳が Pinault (1990: 65) によって、また CEToM の当該断片の項目には英訳も与えられているため、本稿では和訳を与えない。

<sup>17</sup> ロシア所蔵トカラ語 B 断片 SI 5539 (= SI Kr. IV/826) は、状態が良好ではないが、残存部分に見える *muktikai* から「*Muktālatā-avadāna*」に比定される。

<sup>18</sup> この物語はサンスクリットでは「*Višvantara-jātaka*」という題名で知られているが、ソグド語版との対比を重視したため、本稿ではソグド語研究で通用しているパーリ語の「*Vessantara-jātaka*」とした。残念ながら、主人公と二人の子供の名前は残されていないため、当該二断片の「*Vessantara-jātaka*」への比定は、内容及び *māndri* と推定される人名に依拠している。この物語はインドから中央アジアを経て中国に至る地域で好ま

SI B 131-1)であるが<sup>19</sup>、同じく《*Vessantara-jātaka*》に比定される、ムルトゥク発見のドイツ所蔵トカラ語 B 断片 B370 は、形状や文字特徴及び行間などの特徴がこの二断片と良く一致していることから、この三断片は同一の写本に属していたと考えられ、筆者の推定が正しいならば、当該の二断片も同じくムルトゥクで発見されたと結論付けられる<sup>20</sup>。そのため、本節ではドイツ所蔵断片 B370 も扱う。

#### 5-1. SI 2962-2 + SI 2998-8 の転写と和訳

SI 2962-2 はサイズが約横 17.6cm×縦 15.6cm で、紐穴のやや左から右側を残しているが、folio の右端は残存していない。一方の SI 2998-8 は、サイズが約横 10.2cm×縦 15.6cm、folio の左端から紐穴の周辺に設けられた空白部分までを含んでいる。また、左端には folio の番号として<30>が窺え、その下の数字は<7><8><9>のいずれか(或いは<4><5>も含まれるかも知れない)と推定されるが、確定することはできない。この断片の裏面は文字の磨滅が激しく、解読が困難である。なお、この二断片は直接接合し、接合後のサイズは約横 27.7cm×縦 15.6cm、行間は約 2.4cm で、紐穴は folio の左端から約 11.4cm の位置に穿たれている。両断片の文字は、トゥルフアン地域将来の後期のトカラ語 B 断片によく見られる類型に属しているが、<ta><na>は明瞭に区別される<sup>21</sup>。一方、言語特徴についても後期トカラ語 B の特徴が散見され<sup>22</sup>、上で言及したムルトゥク発見という推定と矛盾しない。以下には、接合後の転写を与える。

#### Transliteration

a

1 [y]āmoṣ\ ārtāṣ\ [1] śtwe (·)[c]y· naṣṣem yetwe[nne] r[e]rittoṣ\ bodhiṣṣe kokle : [k̄a] ///

2 k[ī]tsai :1 || tane brāhmaṇe kokale eṅkorme[m] makā yākne kakā[tk̄a] ///

れたため、各地に浮彫や壁画といった図像資料が残されており、この物語に関連する図像資料及び文献資料を網羅的に扱った共同研究の成果の概要が吉田 (2001) として報告されている。また、ソグド語版については、この物語に対応する各種言語資料との比較研究を行った Yoshida (2013) を、この物語に比定される図像資料を体系的に扱った研究として影山 (2001) を参照されたい。なお、トカラ語 B 写本が大量に発見されたクチャ地域の石窟にも当該の物語は数多く描かれており、特にキジル石窟第 81 窟の壁画は物語の展開に従って描かれていると考えられ、クチャ地域に伝えられた当該の物語の大枠を窺わせる。この壁画については、中川原 (2011) を参照。

<sup>19</sup> SI 2998-9 (= SI B 131-2) も形状や文字特徴及び行間などの特徴が一致しており、同一写本に属すると思われるが、《*Vessantara-jātaka*》に比定され得るか否かは不明であるため、本稿では扱わない。なお、筆者は、SI 2998-8 が《*Vessantara-jātaka*》に比定される点及びドイツ所蔵断片 B370 と同一の写本に帰属する点について、2016 年 10 月 5 日に《New fragment of the *Vessantara-jātaka* in Kuchean》というタイトルで学会発表を行ったが (The 6th international symposium on oriental ancient documents studies organized by the Institute of Oriental Manuscripts・2016 年 10 月 3-5 日・於サンクトペテルブルク)、その直後の調査によって、SI 2962-2 が当該断片と直接接合することに気付いたため、本稿での解釈は多くの点で当該の発表とは内容が異なっている。

<sup>20</sup> ドイツ所蔵断片とロシア所蔵断片が直接結びつく例は、トカラ語文献に関してはこれまで知られていないが、ほぼ同一の内容を書き記したトカラ語 B による木簡が各一点ずつ知られている。この木簡については、Ogihara and Ching (2016) を参照。

<sup>21</sup> 当該断片のブラーフミー文字は、Sander (1968: 182-183, Tafel 29-40) に従えば North Turkestan Brāhmī, Type b に分類されるが、この字形は Sander (2005[2009]: 135) によれば九世紀以降とされる。

<sup>22</sup> SI 2962-2 + 2998-8a3 に見える *samaiṣkaṃ* 及び a4, a6 に在証される *māncuṣke* が、後期トカラ語 B の言語特徴を示している。この二つの語形については、Peyrot (2008b: 54-55, 76-77) を参照。

- 3 ndr[i] • antsan[e]s̄. śamai- O śkaṃ prema[n]e auntsate karās̄ ya ///  
 4 appakka war pete- O me yokaici nesem̄ || māñcu (·)e ///  
 5 r̄ källām̄ || māndri we[śśam̄] saswa mā ś wane<sup>[2]</sup> yatsi [ca] m(·)au [y](·)ā  
 - ///  
 6 [s]au • ś(·)ek[k]a nai añī[ye] {-} [llaṃ mā]ñ[c]. ///  
 b  
 1 - (·)śa - lk[au] wa r̄ [y]. {-} [śśa]lya ·[u]<sup>[3]</sup> ///  
 2 rīya ynem nai wārpo[s]. • sampā ksa erkattse l[k]ātār (·)[m]. (·)[w]. ///  
 3 añī[īy]. (·)[mttā]r̄ t̄ O meṃ yane[m̄] || tumem̄ te[tkā]k̄ ś̄ y(·) ///  
 4 ma[ne] - - (·)[t](·) [la]- O klessor̄ kukāśśītār̄ tsatku {-} \\ ///  
 5 r̄ m[ā]c[er] (·)[e] ·[m̄] -<sup>[4]</sup> (·)[t]. - wa[̄] lareñ̄̄ mai nta kca āyor̄  
 aicer̄ ·[s]. ///  
 6 ai[m̄ y]. - [śśi k](·)[e] - śtār̄ alye[ñkamts̄]<sup>[5]</sup> <kar[ts]e> rītātār̄ sū  
 pañākte mās(·) ///

### 注釈

- (1) 期待される語形は<ārtaś>である。  
 (2) この部分の<ne>の読みは確実であるが、文脈からは<te>が期待される。  
 (3) 残存部分から、この箇所は(p)u 或いは(s)u のいずれかと考えられる。  
 (4) 或いは punctuation かも知れない。また、先行する akṣara は<śam>と読めるかも知れない。  
 (5) 期待される語形は<alyeñkamts̄>である。

### Transcription

- a  
 1 yāmoṣ̄ ārt(t)aś̄ śtwe(r)cy(a)naśsem̄ yetwenne rerittoṣ̄ bodhiśśe kokle : kā ///  
 2 kūtsai<sup>[1]</sup> : 1 || tane brāhmaṇe kokale eñkormem̄ makā yākne kakāt̄k̄(śśu) ///  
 3 ndrī<sup>[2]</sup> • antsan(e)a śamai- O śkaṃ premane auntsate karās̄ ya(tsi) ///  
 4 appakka war pete- O me yokaici nesem̄ || māñcu(śk)e ///  
 5 r̄<sup>[3]</sup> källām̄ || māndri weśśam̄ saswa mā ś wa(t)e yatsi cam(p)au y(·)ā - ///  
 6 sau<sup>[4]</sup> • śekka<sup>[5]</sup> nai añīye (kā)llaṃ<sup>[6]</sup> māñc(uske) ///  
 b  
 1 - (·)sā (pā)lkau wa r̄(ī)y(e ta)śśalya<sup>[7]</sup> ·u ///  
 2 rīya<sup>[8]</sup> ynem nai wārpos(a) • sampā ksa erkattse lkātār (·)m̄ (·)w̄ ///  
 3 añīy( = ai)mttār<sup>[9]</sup> t̄(u)- O meṃ yanem̄ || tumem̄ tetkāk̄ ś̄ y(·) ///  
 4 mane (āyor)n̄t̄(se)<sup>[10]</sup> lā- O klessor̄ kukāśśītār̄ tsatku ///  
 5 r̄<sup>[11]</sup> mācer (n)e(sā)ṃ<sup>[12]</sup> (:) t̄(a) (k̄,ce)<sup>[13]</sup> wat lareñ̄̄ mai nta kca āyor aicer  
 (k̄,se) ///  
 6 aiṃ y. - śśi k(·)e (ñā)stār<sup>[14]</sup> alyeñk(ā)mts̄ <kartse> rītātār̄ sū pañākte  
 mās(ketār) ///

注釈

- a1-2: 2行目に見える<1>は、この部分が韻文であることを示している。韻律の名称が残されておらず、確実な推定を為し得ないが、4行×15音節で構成されているかも知れない。なお、*yetwenne* は女性名詞 *yetwe* ‘decoration’の複数処格であり、先行する形容詞には男性複数斜格形<sup>0</sup>-*šsem* ではなく、女性複数斜格形<sup>0</sup>-*ššana* が期待されるが、文法的に正しい後者では韻律の要求よりも一音節超過するため、男性形を使用していると考えられる。
- (1) Toch.B *wakītstse* ‘distinguished, excellent’の女性単数斜格形(*wa*)*kūsai* が推定される。
  - (2) 主人公 *Vessantara* の妻である(*mā*)*ndri* が推定される。
  - (3) 文脈から(*wa*)*r* ‘water’が推定される。
  - (4) 先行部分を欠いているため、確実な推定を行ない得ないが、動詞の過去分詞男性単数主格形、或いは *nes-* ‘to be’の一人称単数現在形(*ne*)*sau* が推定されるかも知れない。
  - (5) トカラ語 B の形態論に従えば、この部分は *šek* ‘always’と *ka* ‘emphasizing particle’と分析されるが、筆者はこの部分が、追放先へ赴く途中、水を得られずに困窮している主人公の一行に関する描写と考え、*šek ka* という解釈を採らず、筆者が戒本に比定し、出版したドイツ所蔵トカラ語 B 断片 THT1579b4 に在証される *šekkāka* ‘for a single moment’と同義語と見做し、当該の語の語末に附された強意の小辞 *ka* を欠いた *šekka* と解釈した。
  - (6) この部分には *kālp-* ‘to obtain’の接続法三人称単数・複数能動態(*ka*)*llam* が推定されるものと考えられる。
  - (7) この行は磨滅が激しく、確実な推定を行ない得ないが、*pālk-* ‘to see’の過去分詞男性単数主格形(*pā*)*lkau* 或いは接続法一人称単数能動態(*pā*)*lkau* 並びに *wa* ‘therefore’が含まれているかも知れない。先行する語は *nes-* ‘to be’の三人称単数現在形(*ne*)*sā(m)*かも知れないが、確定できない。また、後続部分は *rīye* ‘city’の単数主格形 *r(ī)y(e)*及びこの語と性が一致する *tā-* ‘to place, set’の Gerundive I 類女性単数主格形(*ta*)*ššalya* が推定されると思われる。
  - (8) 形容詞 *lāre* ‘beloved’の女性単数呼格形(*la*)*rīya* が推定される。
  - (9) ここには、動詞 *ai-* ‘to take for oneself’の接続法一人称複数中動態(*ai*)*mttār* が推定されるかも知れない<sup>23</sup>。なお、この語形は初出である。また、ここでは *sandhi* が生じていると推定したが、トカラ語では通常 *sandhi* は韻文における音節数調整のために使用される。後続する *daṇḍa* の直前に a2 のようなブラーフミー文字の数詞が見られないため、韻文とは見られないが、極く稀に散文部分にも *sandhi* が生じることがある<sup>24</sup>。
  - (10) この部分には、*āyor* ‘gift, giving’の単数属格形(*āyorn*)*t(se)*が推定されるかも知れない。
  - (11) 名詞 *pācer* ‘father’の単数主格・呼格形 *pācer* が推定される。
  - (12) この部分には、*nes-* ‘to be’の三人称単数現在形(*nesā*)*m* 或いは *yes* ‘you (pl.)’の属格形 (*yesā*)*m* が推定されるかも知れない。ここでは前者を採用し、先行する *pācer* を呼格形と解釈した上で、前行の欠落部分に否定辞 *mā* を推定した。

<sup>23</sup> この動詞語尾は、Peyrot (2008: 155-157) によって、後期トカラ語 B に特徴的な語尾とされている。

<sup>24</sup> ただし、ブラーフミー文字<ya>と<ai>の類似から、書写した者が本来<ye>の後に書かれていた<ai>を落とした可能性もある。その場合、本文は *añīy(e ai)mttār* と復元される。

- (13) ここで推定した *ta k<sub>a</sub>ce* は Adams (2013) にも登録されておらず、トカラ語研究では殆ど知られていないが、Ching and Ogihara (2010[2012]: 103) で指摘したように、フランス所蔵トカラ語 B 断片 PK NS 152b3 には *ta k<sub>a</sub>ce pa(ñakte) ///* という例があり、またロシア所蔵断片 SI 2089 (= SI P 66 a-g) b5: *• ta k<sub>a</sub>ce no ñśak ra tsa śaişşene ašanike nesau //* にも在証される。
- (14) 文脈から動詞の接続法が要求され、ここには *ñāsk-* ‘to seek’ の接続法三人称単数中動態 (*ñā*)*štār* が推定されるかも知れない。

## 和訳

## a

- 1 [...] され、相応しく、(金・銀・琉璃・頗梨という)四種類の(宝石)から成る装飾に結び付けられた菩提の乗り物を<sup>[1]</sup> [...]
- 2 [...] すばらしい [...] //1// そこで、婆羅門は乗り物を受け取ると、種々に満足させ [...]
- 3 [...] マーンドリは肩に女の子を担いで<sup>[2]</sup>、荒野を進み始めました。 [...]
- 4 [...] お父さん、私達に水を下さい。私達は喉が渇いています。王子は [...]
- 5 [...] 私達は水を得られるでしょう [...] <sup>[3]</sup>。マーンドリは言います。あなた、私はもう歩くことができません。 [...]
- 6 [...] しばしの間、彼等はしのぐことができるだろう (?) <sup>[4]</sup>。王子(は) [...]

## b

- 1 [...] を見た (?)。街が造られなければならない。 [...]
- 2 [...] 愛しきものよ、私達は聚落に行きましょう <sup>[5]</sup>。年を取った人 (?) が見えます <sup>[6]</sup>。 [...]
- 3 [...] 私達は回復する (?) [...] <sup>[7]</sup>。そして、彼等は出発します。すると、突然(城郭は消えてしまった?) [...]
- 4 [...] しながら、(子供たちを)布施する苦しみに憔悴し<sup>[8]</sup>、心は迷い [...]
- 5 [...] お父さん、お母さんがいません。愛しき人よ、どうしてあなたは今布施を行おうとなさるのですか<sup>[9]</sup>。誰が(或いは「[...] する者は」) <sup>[10]</sup> [...]
- 6 [...] を与え、[...] を求め、他の人々の幸福を欲すれば、その者は仏陀となる。 [...]

## 注釈

仏果を得るため、あらゆる物を布施していた Vessantara という名前の太子は、ある日、国家の宝である白象を、敵国より派遣された婆羅門に布施したことにより家族と共に追放されるが、追放先に赴く途次においても布施を続け、追放先では二人の子供と妻を布施するに至る。その功德により、彼はこれまで布施したものを取戻し、王位に即く。ここで扱っている SI 2962-2 + SI 2998-8 は、道中における乗り物の布施から、追放先での子供の布施までを含んでいると見られる。

a1-2: Vessantara が乗っていた乗り物を婆羅門に譲渡する場面である。

- (1) Toch.B *štwerčyanaşsem* は初出であるが、形容詞 *štwerčyanaşse\** の男性複数斜格形であり、後続する *yetwe* ‘decoration’ の複数処格形を限定していると思われる。この形容詞の語幹は *štwerčyana\** で、この語形もこれまで在証されていないが、*štverts(ts)e\** 「四種類の」の女

性複数斜格形と解釈される<sup>25</sup>。この四つは、『中阿含経』卷十一「我作刹利頂生王時、有八萬四千車、四種校飾」(T01, no. 26, 496b14-15)の異訳である『雜阿含経』卷十「灌頂王法有八萬四千四種寶車、所謂金車・銀車・琉璃車・頗梨車」(T02, no. 99, 68a5-6)との比較から、「金・銀・琉璃・頗梨」を指すと考えた<sup>26</sup>。なお、ここで言及される「菩提の乗り物」も初出の語であり、インド語の借用語 *bodhi* ‘Bodhi’に形容詞派生接尾辞 *-ṣṣe* によって派生した形容詞を伴っている。ここでは、「菩提へと導く乗り物」と考えた。

- (2) Vessantara の妻の名前は、サンスクリットでは *Mādrī* / *Madrī* だが、トカラ語 B の語形は、B370a3 に在証される形式から *māndri* であることが知られており、これは『根本説一切有部毘奈耶破僧事』卷十六に見える「曼低離」及びソグド語 *mnr 'yh /mandrī* にほぼ対応する。また、トカラ語 B の形態論から見れば、Toch.B *śamaśkaṃ* は *śamaśke* ‘boy’ の複数斜格形と解釈されるが、対応する他言語による《Vessantara-jātaka》では、Vessantara の妻が二人の子供を抱えて進む物語は見られないため、上記 *śamaśke* の女性形として設定される *śamaśka*\* ‘girl’ の単数斜格形と解釈した<sup>27</sup>。なお、本断片と同様に、主人公の妻が女兒を抱えて進むものとしては、パーリ語 (Fausbøll 1896: 513) ・《Jātakamālā》: *atha bodhisattvaḥ prūṭamanā rathād avatārya svajanam niryātya rathavaram brāhmaṇāya jālinam kumāram ankenādāya padbhyām evādhvānam pratyapadyata. avimanaskaiva ca madrī kṛṣṇājīnām kumārīm ankena pariḡṛhya prṣṭhato 'nvagacchad enam* (Hanisch 2005: 85, ll. 12-15) ‘He gladly caused his family to alight from the chariot, presented the Brāhman with it, and taking Jālin, his boy, in his arms, he continued his way on foot. Madrī, she too free from sadness, took the girl, Kṛṣṇājīnā, in her arms and marched after him.’ (Speyer 1895: 82) や『太子須大拏経』「太子自負其男、妃負其女、歩行而去。」(T03, no. 171, 420c24-25) ・『根本説一切有部毘奈耶破僧事』卷十六「時菩薩自負其男而於肩上、又妃將女還安肩上、進路而行。」(T24, no. 1450, 182b7-8) 及びソグド語版 *rty ZKw z 'tk kršny'n pr byk' 'st ZY ZKh mnr 'yh ZY ḡywth c 'r 'ynh pr prch* (VJ: 50-51, ll. 55<sup>e</sup>-57<sup>e</sup>)<sup>28</sup> ‘He held his son, Karshnyan, on his shoulder and Mandrī (bore) her daughter, Jālin, on her back.’ (Yoshida 2013: 408) などが知られている<sup>29</sup>。ただし、ソグド語版は女兒を背中に背負うのに対して、本断片では肩に載せている点で相違が見られる。

- (3) 先行部分を欠いているため、この文は正確に解釈できない。

a3-b3: 本断片 a3-b3 は道中における主人公一行の飢えと疲労に苦しむ様子と見られる。

<sup>25</sup> 接尾辞 *-ts(ts)e* から派生する形容詞の女性複数斜格形は <sup>0</sup>-*ts(ts)ana* であるが、主格形を除く全ての形式で *-ts(ts)- > -c(c)-* の交替を示す男性形からの類推によって、<sup>0</sup>-*ts(ts)ana > <sup>0</sup>-c(c)ana* となり、*-c-* が硬口蓋子音であることから、さらに *-y-* を付した *-cy-* と書かれたものと推定される。

<sup>26</sup> 「四種類の宝石で飾られた車」という表現はその他の言語による当該の物語には見られず、また筆者の知る限り、トカラ語 B 文献でも他の用例を見ない。そのため、この表現が原典に依拠するものか、或いはトカラ語 B への翻訳の段階で付加されたものかを判断し得ない。

<sup>27</sup> この語における *-a- > -ai-* という音変化については、注 22 を参照。なお、この接尾辞による語形成について論じた Malzahn (2013: 114) は *śamaśke* ‘boy’ に対応する女性形を *śamñāśka* とするが、ここから導かれる語幹は *sāmñe* であり、*śamaśke* とは語幹が異なるため、この二語の対応は見当の余地がある。

<sup>28</sup> VJ 出版後、ソグド語の転写方式に変更が加えられたため、ここでは IITUS で公開されているものを利用している。

<sup>29</sup> 八尾 (2013: 373, fn. 2) に指摘されるように、この部分はサンスクリット・チベット語・漢訳で夫婦のどちらがどちらの子供を担ぐかという点で相違が見られるが、「妃は娘を担ぐ」のが一般的であると言う。

Yoshida (2013: 406-407) によれば、《Vessantara-jātaka》においてこのような描写が見られるのは、パーリ語・『太子須大拏経』及びソグド語版である。本断片 b3 には *t(u)mem yanem tumem tetkāk* 「そして、彼等は出発します。すると、突然[以下欠]」とあり、『太子須大拏経』「遂便出城、顧視其城忽然不見」(T03, no. 171, 421a4) 及びソグド語版 *rty 'xw swδ''šn kβny z'yh šw' rty 'xw 'pyšys'r tyk'wš rty wyn w'n'kh z'yh 'kwty ZKh knδh wm't rty šw m'yδ ptw'čh z'yh ZY βr 'yzkh ZY šykth wyn c'n'kw ZY ZKh 'nyw δxsth* ‘Sudāšan fit un peu de chemin, puis il regarda derrière lui, et il vit l'endroit où se trouvait (auparavant) la ville. Il y vit une terre déserte des ronces (?) et du sable, comme dans le reste du désert.’ (VJ: 57, ll. 899-903) とほぼ同一の内容を伝えていると考えられるため、『太子須大拏経』及びソグド語版のみに見られる「城郭」に関する描写が、本断片 b2-3 の欠落部分にも語られていたと推定される。

- (4) 先行する文脈を欠いており、確実な推定とは言い難いが、字義としては「息を得る」を表す *añīye kālp-* を、前後の文脈から「危機的状況から逃れる」といった意味を表すものと解釈した。筆者の解釈が正しいならば、飢えと疲労で苦しんでいる妻たちに Vessantara が何らかの対応をしたと考えられる。Yoshida (2013: 407-411) によれば、対応する他言語の版本中で、このような Vessantara の対応はソグド語・古代ウイグル語・モンゴル語版のみに見え、そこでは Vessantara が自らの足の肉を削いで調理した上で、家族に与える場面が描かれている。

b1: 筆者の推定が正しいならば、この部分は主人公一行の飢えと疲労の様子を天上界から見た Śakra が、彼等を救うために城郭を現出する場面と考えられ、『太子須大拏経』「忉利天王釋即於壙澤中，化作城郭市里街巷、伎樂衣服飲食。」(T03, no. 171, 420c28-29) 及びソグド語版 *rty 'xw c'wn — rxwšn 'yrδmnhw c'δrs'r tyk'wš 'HRZY 'xw wyn ZKw swδ''šn w 'βyz'xwkwsth 'M wδyh mntr'yh 'PZY δnn z'kty pr'yw rty šy ywyz'kw z'ry 'sy' 'Du haut du Paradis lummineux il abaissa ses regards, et vit Sudāšan dans cette misère avec sa femme et avec ses enfants, il en eut grand'pitié.’ (VJ: 53, ll. 820-824) に対応する。*

- (5) ここで「聚落」と訳した *wārpo\** は初出であるが、パーリ語・『太子須大拏経』・ソグド語版では、主人公一行は道中で「城郭」を見出すことになることから、*wārpo\** を「聚落」と訳した<sup>30</sup>。ここに在証される *wārpoša* は *wārpo\** の単数通格形であり、目的とする方向を示していると考えられる<sup>31</sup>。また、この語は *wārpa-* ‘to surround’ の派生語であり、この語根からの派生語としては *werpiye\** ‘garden’ が知られている。

- (6) この部分の断片の状態は良く、*erkantse* 或いは *erkattse* と読むことができ、前者は医学文献に在証されるが、語義を確定するには至っておらず、漠然と治療のために作られる薬とされている。本断片の文脈から、このような語義も否定することはできないが、筆者はソグド語版を参照に後者を選択した。即ち、ソグド語では *rty 'xw ''δδβγ ZKw yr'ywh ywttym s'kw mrty wn' ZKh wrs 'sp'ytk ZY ZKh ryth krm'y'r ZY cnsty prnxwnt'w ZY kršn'w p'r'yz 'Le*

<sup>30</sup> ただし、在証例が他には知られていないため、b1 で推定した *rīye* とここに見える *wārpo\** の語義の差異を明らかにし得ない。

<sup>31</sup> この通格の用法については、Carling (2000: 50-51) を参照。

Dieu Suprême se donna à lui-même l'apparence d'un vieillard aux cheveux blancs et un visage rouge, tout à fait glorieux, beau et excellent' (VJ: 54, ll. 836-839) と老人に姿を変えた Śakra が、Vessantara 一行を食糧・水等を備えた城郭で出迎える記述が見られ、筆者は *erkattse* がこの老人に対応すると考えた。なお、Toch.B *erkattse* は 'painfully(?)' (Adams 2013: 101) と解釈されており、語義が確定されていないが<sup>32</sup>、語釈において 'nauseous, stiff' or (most likely) 'painful' とともに述べており、城郭を現出させた Śakra が姿を変えた後の状態を描写したものと考え、ソグド語版を参照し、暫定的に「年を取った」と和訳した<sup>33</sup>。

- (7) 確実な推定とは言い難いが、前後の文脈から *añīye ai-* を「息を得る = 回復する」と解釈した。なお、この箇所は先行部分を欠いており、接続法の意味を確定できない。また、この箇所と *tumem* 'thereupon' 以降の部分では人称が一人称複数から三人称複数へと変わっていることから、この箇所までが Vessantara の発話を表し、後続部分は事態の展開を描写していると考えられる<sup>34</sup>。

b4-6: 断片の状態が悪く、文脈を正確に把握することは難しいが、Vessantara による子供の布施の場面であると推定される。

- (8) Toch.B *lāklessor* は初出だが、接尾辞 *-r* によって形容詞 *lāklessu* 'unhappy' から派生された名詞と考えられる。このような語形成は従来指摘されたことはないが、動詞の過去分詞から接尾辞 *-r* によって派生される名詞形の存在が知られており、同様に解釈される。また、この部分は、『根本説一切有部毘奈耶薬事』卷十四「爾時菩薩聞婆羅門語已、而復思惟。為愛子故、迷亂其心、而説頌曰。」(T24, no. 1448, 66b14-15) ・ «*Jātakamālā*»: *sa mahāsattvaḥ pradānakathāśravaṇoṭpatitaviṣādaviplutākṣayoḥ sutayoḥ snehavegenāvalambyamānahrdayo bodhisattva uvāca* (Hanisch 2005: 87, ll. 12-14) 'Now the children, having heard their father saying he would give them away, became afflicted, and their eyes filled with tears. His affection for them agitated him, and made his heart sink. So the Bidhisattva spoke' (Speyer 1895: 84) と同趣旨を述べていると考えられる。なお、Toch.B *kukāṣṣītār* は初出であるが、*kuk-* 'to bow down (?), exhaust' の未完了三人称単数中動態の形式である。

- (9) 先に言及したように、Toch.B *ta k<sub>v</sub>ce* の在証例は先に引用した二例しかなく、語義が把握し難い。第一要素の *ta* は *tane* 'here' の語幹と同一視されると考えられるが、語源は不明である。また、Toch.B *aicer* は初出だが、*ai-* 'to give' の接続法二人称複数能動態の形式である。この部分は *ambā ca tāta niṣkrāntā tvaṃ ca nau dātum icchasi* (Hanisch 2005: 88, l. 21) 'Mother is out of doors, while you are about to give us away.' (Speyer 1895: 86) に関連すると見られる<sup>35</sup>。なお、筆者が把握している限り、トカラ語において、二人称複数が二人称単

<sup>32</sup> Carling (2003: 89-90) は、この語に対して 'boiling, burning, hot' という訳を与えている。Adams によるいずれの解釈を取るにしても、健全ではない状態を表しているものと見られる。

<sup>33</sup> トカラ語 B では「年を取った」という概念を表す語として *ktsaitstse* 'old (of age)' が知られており、ここで提示したように *erkattse* が「年を取った」という意味を表すならば、この語は「年齢が高い」ことを表すのではなく、年を取ったと判断させる何らかの外見的特徴を表していたと考えられる。

<sup>34</sup> ここから、*tumem* に先行する箇所は従属節であった可能性を指摘することができる。

<sup>35</sup> この句は漢訳及び藏訳『根本説一切有部毘奈耶薬事』にも見られ、漢訳では卷 14「我等不見母 今將施與彼」(T24, no. 1448, 66c8) とある。なお、藏訳については八尾 (2013: 375) を参照。



数の敬語として使用されている用例は知られていないが、筆者によって推定された文脈から、このように解釈した。

- (10) 和訳では疑問詞と解釈したが、関係詞と解釈する可能性も否定できない。なお、この行は「父・母」という語が見えることから、Vessantara の子供による発話であると考えられ、後続する行は Vessantara 自身の発話と見られる。

以上のように、ロシア所蔵断片 SI 2962-2 + SI 2998-8 から復元された内容は、下記の三つの場面から構成されていると見られる。

(1) = a1-2: Vessantara による婆羅門への乗り物の譲渡

(2) = a3-b3: 道中における Vessantara 一行の苦難と Śakra が現出した城郭への滞在

(3) = b5-6: Vessantara による子供の布施

この物語はパーリ語を含む各種の言語で伝えられているが、ここでは比較的良く対応し、本文に欠落のない漢訳仏典の対応箇所を引用する。なお、以下の引用において、トカラ語 B 断片の内容理解に資する部分は太字で示し、関連の見られない部分は省略した<sup>36</sup>。

『太子須大拏経』

「復逢婆羅門來乞車。太子即以車與之。適復前行、復逢婆羅門來乞。太子言。我不與卿有所愛惜也。我財物皆盡。婆羅門言。無財物者、與我身上衣。太子即解賣衣與之、更著一故衣。適復前行、復逢婆羅門來乞。太子以妃衣服與之。轉復前行、復逢婆羅門來乞。太子以兩兒衣服與之。太子布施車馬錢財衣被了盡、初無悔心大如毛髮。太子自負其男、妃負其女、步行而去。太子與妃及其二子、和顏歡喜相隨入山。

檀特山去葉波國六千餘里。去國遂遠、行在空澤中大苦飢渴。切利天王釋即於壙澤中、化作城郭市里街巷、伎樂衣服飲食。城中有人出迎太子、便可於此留止飲食以相娛樂。妃語太子。行道甚極、可暇止此不。太子言。父王徙我著檀特山中、於此留者違父王命、非孝子也。遂便出城、顧視其城忽然不見、轉復前行到檀特山。山下有大水深不可度、妃語太子。且當住此、須水減乃渡。太子言。父王徙我著檀特山中、於此住者違父王教、非孝子也。太子即入慈心三昧、水中便有大山以堰斷水、太子即與妃褰裳而渡。渡已、太子即心念言。便爾去者、水當澆灌殺諸人民蝸飛蠕動。太子即還顧謂水言。復流如故。若有欲來至我所者、皆當令得渡。太子適語已、水即復流如故。

前到檀特山中、太子見山巖崑嵯峨、樹木繁茂百鳥悲鳴、流泉清池美水甘果、鳧鴈鷓鴣、翡翠鴛鴦異類甚衆。太子語妃。觀是山中樹木參天無折傷者、飲此美泉、噉是甘果、而此山中亦有學道者。太子入山、山中禽獸皆大歡喜、來迎太子。

[中略]

太子遙見婆羅門來、甚大歡喜迎為作禮、因相勞問。何所從來。行道得無疲極。何所索乎。

<sup>36</sup> 《Jātakamālā》では Hanisch (2005: 85-90) に、ソグド語版では VJ: 50-62, ll. 37<sup>a</sup>-997 に対応するが、両者ともかなり長いので、ここでは漢訳仏典のみを引用する。なお、この部分のフランス語訳については、Chavannes (1911: 374-384) を参照。

婆羅門言。我從遠方來、舉身皆痛又大飢渴。太子即請婆羅門入坐、出果菴水漿著其前。婆羅門飲水食果竟、便語太子言。我是鳩留國人也、久聞太子好憲布施名聞十方。我大貧窮、欲從太子有所乞丐。太子言。我不與卿有所愛也。我所有盡賜、無以相與。婆羅門言。若無物者、與我兩兒以為給使、可養老者。如是至三。太子言。卿故遠來、欲得我男女、奈何不相與。時兩兒行戲、太子呼兩兒言。婆羅門遠來乞汝、我已許之。汝便隨去。兩兒走入父腋下、淚出且言。我數見婆羅門、未嘗見是輩。此非婆羅門、為是鬼耳。今我母行採果未還、而父持我與鬼作食、定死無疑。今我母來索我不得、當如犍牛覓其犢子、便啼哭號泣愁憂。太子言。我已許之。何從得止。是婆羅門耳、非是鬼也、終不噉汝。汝便逐去。婆羅門言。我欲發去、恐其母來便不復得去。卿持善心與我、母來即敗卿善意。太子報言。我從生已來、布施未嘗有悔也。

太子即以水澡婆羅門手、牽兩兒授與之、地為震動。兩兒不肯隨去、還至父前長跪、謂父言。我宿命有何罪、今復遭值此苦、乃以國王種為人作奴婢。向父悔過、從是因緣罪滅福生、世世莫復值是。太子語兒言。天下恩愛皆當別離、一切無常何可保守。我得無上平等道時自當度汝。兩兒語父言。為我謝母、今便永絕恨不面別、自我宿罪當遭此苦。念母失我憂苦愁勞。婆羅門言。我老且羸、小兒各當捨我走至其母所、我奈何得之。當縛付我耳。太子即反持兩兒手、使婆羅門自縛之、繫令相連總持繩頭。兩兒不肯隨去、以捶鞭之、血出流地。太子見之淚下墮地、地為之沸。太子與諸禽獸皆送兩兒、不見乃還。諸禽獸皆隨太子、還至兒戲處、呼哭宛轉而自撲地。」

(T03, no. 171, 420c16-422b14)

以上に挙げた対応から、筆者による SI 2962-2 + SI 2998-8 の《*Vessantara-jātaka*》への比定が支持されることが窺える。

## 5-2. ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 B370 について

前述のように、ロシア所蔵の二断片の他にもドイツ所蔵断片 B370 が TochSprR(B) II: 244 によって《*Vessantara-jātaka*》に比定されており、《*Jātakamālā*》における対応箇所が注記されている<sup>37</sup>。SI 2962-2 + SI 2998-8 及び B370 は同一写本に属していたと見られるだけでなく、また B370 の全体の解釈はこれまで提示されたことがない点に鑑みて、以下ではこの断片を扱う。当該の断片はムルトウクで発見され、サイズが約横 14.8cm × 縦 15.7cm、行間は約 2.4cm で、紐穴の右側に相当するが、folio の右端を欠いている。文字特徴は SI 2962-2 + SI 2998-8 と同一の類型に属し、また言語特徴の面でも後期トカラ語 B の特徴が散見される<sup>38</sup>。

### Transliteration

a

1 ///[s]· satāskeman[e] mā campya [we]ntsi •///

<sup>37</sup> 同じく《*Vessantara-jātaka*》に比定されるドイツ所蔵トカラ語 A 断片 A70 (= TH1703) については、Sieg (1952: 43-44) 及び Thomas (1989: 16-26) によって、《*Jātakamālā*》との間に顕著な一致が見られることが指摘されている。

<sup>38</sup> 本断片を Peyrot (2008b: 221) は古典期に分類するが、a4 に見える *ās* は後期トカラ語 B の特徴を示している。この点については Peyrot (op.cit.: 70-71) を参照。

- 2 /// ɽ\ || māñcuške weṣṣam̄ klyaumñā brāhma ///  
 3 /// (·)y· ṣormem̄ māndri lakleñ<sup>a</sup>\ naittatsi au[n]· ///  
 4 /// [ts]· āś<sup>a</sup>\ kenīne parāṃ prat[s]ākaisa - ///  
 5 /// [y]sāra ·[k]ā (·)e - {- -} -<sup>[1]</sup> lu -<sup>[2]</sup> - ñmai [p]· ///  
 6 /// - - {- - - -} ·[se]nketar\ - ///

b

- 1 /// -<sup>[3]</sup> -<sup>[4]</sup> {- - -} - ·r· ksa kentsa kl· ///  
 2 /// tā k[au s]· - {-} (·)[k]· - [k]· ñm· [l]o na sa ///  
 3 /// lyine raksemane<sup>[5]</sup> weṣṣam̄ || mando - ///  
 4 /// [t]koṣ\ ñsamem̄ : pālwāmane tallā ///  
 5 /// ɽ\ ñiś\ tsuwai porośicer\ [ñi] ///  
 6 /// [k]· ñmatsi ṣ(·)ī ·e ro tñi keni[n]e [ś]au[l] \ ///

## 注釈

- (1) 或いは、(·)[ka]と読むことができるかも知れない。  
 (2) 或いは、(·)[w]と読むことができるかも知れない。  
 (3) 或いは、[la]と読むことができるかも知れない。  
 (4) 或いは、[c]と読むことができるかも知れない。  
 (5) この<kse>に附されている付加母音<e>には、さらに<ña>に附される長母音<ā>のような stroke が附されている。

## Transcription

a

- 1 /// ·s· satāskemane mā campya wentsi · ///  
 2 /// r || māñcuške weṣṣam̄ klyaumñā brāhma(ñe) ///  
 3 /// (kekl)y(au)ṣormem̄ māndri lakleñ naittatsi aun(tsate) ///  
 4 /// (māndrin)ts(e) āś kenīne parāṃ pratsākaisa - ///  
 5 /// ysāra ·kā (·)e - {- -} - lu - - ñ nai p· ///  
 6 /// - - {- - - -} (t)senketār - ///

b

- 1 /// - - {- - -} - (t)r(aī)ksa kentsa kl(āya) ///  
 2 /// tā kau s· - {-} (·)k· - k(a)ñm(a)lona sa ///  
 3 /// (ā)lyine raksemane weṣṣam̄ || mando - ///  
 4 /// (wā)koṣ ñsamem̄ : pālwāmane tallā(ñtām) ///  
 5 /// r ñiś tsuwai porośicer ñi ///  
 6 /// k(a)ñmatsi ṣ(m)ī(c)er ot ñi kenine śaul ///

## 和訳

a

- 1 [...] (王子は)嘆息しながら、話すことができませんでした。 [...]

- 2 [...] 王子は言います。愛する者よ、婆羅門が [...]
  - 3 [...] を聞くと、マーンドリは苦痛によって崩れ落ち始めました。 [...]
  - 4 [...] (マーンドリの)頭を膝に抱え、胸に [...]
  - 5 [...] 血(?) [...]
  - 6 [...] (マーンドリは)立ち上がります。 [...]
- b
- 1 [...] (マーンドリは)よろめいて、地面に倒れました。 [...]
  - 2 [...] 遊ばれるべき<sup>[1]</sup> [...]
  - 3 [...] (マーンドリは)手のひらを伸ばして、言います。|| Mando([...] の曲調で) [...]
  - 4 [...] 私から離れた [...] 嘆きながら、みじめな<sup>[2]</sup> [...]
  - 5 [...] 私 [...] あなた達は育った。私の(?) [...]
  - 6 [...] そして、あなた達は遊ぶために私の膝に座っていた。命(?) [...]

注釈

- a1: TochSprR(B) II: 244, fn. 9 は、この部分が布施される二人の子供の会話の可能性を指摘するが、*«Jātakamālā»: atha bodhisattvo jānānaḥ snehadurbalatām mātṛḥṛdayasya durnivedyātvaḥ ca vipriyasya nainām kiṃ cid vaktuṃ śasāka* (Hanisch 2005: 91, ll. 26-27) ‘Now the Bodhisattva, knowing the tenderness of a mother’s love and also considering that bad news is hard to be told, was not able to make any answer.’ (Speyer 1895: 89) に対応すると見られる。
- a2: *«Jātakamālā»: jarādāridryaduḥkhārto brāhmaṇo mām upāgamat* (Hanisch 2005: 92, l. 13) ‘See, a Brāhman suffering from old age and poverty has come to me.’ (Speyer 1895: 90) を参照。
- a3-4: *«Jātakamālā»: ity uktvā śokāgninā parigataḥṛdayā chinnamūleva latā nīpapāta / patantīm eva cainām parigrhya bodhisattvas tṛṇāsayanam ānīya sītābhir adbhīḥ pariśicya pratyāgataprāṇāṃ samāśvāsayan uvāca.* (Hanisch: op.cit. ll. 8-10) ‘No sooner had she said these words, than over-powered by the sorrow that tortured her heart, she sank down like a creeper violently cut off. The Bodhisattva prevented her from falling to the ground, clasping his arms around her, and brought to a grass couch, on which lying and being sprinkled with cold water she recovered her senses. Then he endeavoured to comfort her, saying.’ (Speyer 1895: 89) を参照。
- b4-6: 二人の子供が布施されたことに対する、マーンドリの嘆きの描写と見られる。この描写は*«Jātakamālā»*には見られないが、『根本説一切有部毘奈耶破僧事』及び『根本説一切有部毘奈耶藥事』には、類似した内容を含むマーンドリの嘆きが描写されている<sup>39</sup>。前者のサンسكريット版は Gnoli (1978: 128-129) を、後者の漢訳は『根本説一切有部毘奈耶藥事』巻十四 (T24, no. 1448, 67a22-b08) を、同蔵訳については八尾 (2013: 377) を参照。
- (1) この語形は女性複数主格・斜格形であるため、被修飾語は「玩具」であったと推定され

<sup>39</sup> 『根本説一切有部毘奈耶藥事』には*«Vessantara-jātaka»*が二度説かれており、異同が認められる。即ち、最初のものでは、*«Jātakamālā»*及び漢訳『太子須大拏経』とは異なり、布施された事実を知った後にマーンドリの嘆きの場面が語られており、この点では B370 と一致するが、マーンドリが意識を失わない点は B370 とは相違する。一方、二つ目のものではマーンドリは布施の事実を知り、意識を失うが、意識を取り戻した後に嘆きは見られない。これらの部分については、八尾 (2013: 377-378 及び 387) を参照。

る。叙述の順序は異なるが、この部分は、二人の子供を探すマーンドリの心理を描写した場面に見られるサンスクリット版『根本説一切有部毘奈耶破僧事』 *imāni ca tayoh krīḍanakāni* (Gnoli 1978: 128, ll. 14-15) 及び蔵訳『根本説一切有部毘奈耶棄事』「これはかれら二人の遊び道具である」(八尾 2013: 377) と関連するかも知れない<sup>40</sup>。

(2) TochSprR(B) II: 244, fn. 16 によれば、この部分の韻律は 7/7/4 となり、欠落は 1 音節と考えられるため、形容詞 *tallāw* ‘miserable, unhappy’ の男性複数斜格形が推定される。

以下に、前節同様に比較的良く対応する漢訳仏典の対応箇所を引用する。なお、以下の引用において、トカラ語 B 断片の内容理解に資する部分は太字で示す<sup>41</sup>。

『太子須大拏経』

「妃還、見太子獨坐、不見兩兒。自至其草屋中索之不見、復至兒屋中覓之不見、至兒常所戲水邊亦復不見、但見與所戲禽獸麋鹿師子獼猴、皆在曼坻前自撲號呼、所戲池水為之空竭。曼坻便還至太子所、問太子。兩兒為何所在。太子不應。曼坻復言。兒遙見我持果走來、趣我躡地復起跳踉、呼言。阿母來歸見我。坐時皆在左右、見我身上有塵土即為我拂去之。今亦不見兒、兒亦不來附我、為持與誰乎。今不見之、我心摧裂。早語我處、莫令我發狂。如是至三、太子不應。曼坻益更愁毒言。不見兩兒尚復可耳、太子不應、益令我迷荒。太子語言。鳩留國有一婆羅門來、從我乞兩兒、便以與之。妃聞太子語、便感激躡地如太山崩、宛轉啼哭而不可止。太子言。且止。汝識過去提和竭羅佛時本要不耶。我爾時作婆羅門子、字鞞多衛。汝作婆羅門女、字須陀羅。汝持華七莖、我持銀錢五百、從汝買華欲以散佛、汝以二莖華寄我上佛、而求願言。願我後生常為卿妻、好醜不離。我爾時與汝要言。欲為我妻者當隨我意、在所布施不逆人心、唯不以父母施耳。其餘施者、皆隨我意。汝爾時答我言可。今以兒布施、而反亂我善心耶。妃聞太子言、心意開解便識宿命、聽隨太子布施疾得心所欲。」

(T03, no. 171, 422b27-c23)

B370 は残存情況が悪く、文脈の復元は困難であるが、TochSprR(B) II に指摘されるように、二人の子供が見当たらない理由を夫に尋ね、婆羅門に布施されたことを知ったマーンドリの様子及び子供を失ったマーンドリの嘆きに相当すると見られる。以上の点から、叙述の精粗にもよるが、本断片は前節で扱った SI 2962-2 + SI 2998-8 に直接後続するか、或いは 1 folio 欠落の後に続く folio であった可能性が高い。なお、本断片の描写が《*Jātakamālā*》及び上引の漢訳『太子須大拏経』と一致しない点は重要である<sup>42</sup>。即ち、この二つの作品では、子供が布施されたことを知ったマーンドリが嘆く場面は説かれておらず、また《*Jātakamālā*》

<sup>40</sup> ソグド語版でも、二人の子供たちがおもちゃのお寺で遊んでいた点が記されている。この点については、VJ: 67, l. 1117 を参照。

<sup>41</sup> 《*Jātakamālā*》では Hanisch (2005: 91-93) に、ソグド語版では VJ: 65-68, ll. 1067-1122 に対応する。なお、この部分のフランス語訳については、Chavannes (1911: 385-387) を参照。

<sup>42</sup> Thomas (1989: 26, fn. 84) では、本断片は《*Jātakamālā*》に関連箇所が見られる一方、《*Jātakamālā*》そのものの翻訳ではない点が指摘されている。

ではマーンドリが真相を知るのは意識を取り戻してからである。一方で、本断片における物語の展開の順序がソグド語版と良く一致している点は、注目に値する。

### 5-3. トカラ語 B 訳《*Vessantara-jātaka*》断片の位置付けについて

本節では、前二節で解釈した《*Vessantara-jātaka*》のトカラ語 B 訳の位置付けを検討する。上で扱った SI 2962-2 + SI 2998-8 及び B370 において、《*Jātakamālā*》と一致する記載は部分的なものに留まり、物語の展開全体を視野に入れた場合、《*Jātakamālā*》は SI 2962-2 + SI 2998-8 で語られている内容の内、先に(2)とした「道中における Vessantara 一行の苦難と Śakra が現出した城郭への滞在」を欠いている<sup>43</sup>。また、B370 に言及されるマーンドリの嘆きも見られない。従って、《*Jātakamālā*》との間に顕著な一致が認められるトカラ語 A 断片 A70 とは異なり、本稿で検討したトカラ語 B 版は《*Jātakamālā*》に基づいた翻訳とは考えられない。一方で、これらの相違点はソグド語《*Vessantara-jātaka*》と良く一致する<sup>44</sup>。

重要なのは、ここで検討しているトカラ語 B 版《*Vessantara-jātaka*》が既知のインド語版とは一致しないという点である。現在知られている範囲内では、トカラ語仏典はインド語を原典としていたと考えられ、漢訳仏典の影響を想定しなければならないものは指摘されていないため、トカラ語 B 版《*Vessantara-jātaka*》の原典は、既に滅びてしまった、我々が知らないインド語版に基づいていた可能性がある。一方、現時点においてトカラ語 B 版と最も近い関係を示すソグド語版は原典を確定することができず、インド語版或いは『太子須大拏経』との関連が指摘されているが<sup>45</sup>、筆者にはいずれの説が妥当であるかを判断し得ない。『太子須大拏経』の原典となったインド語のものがかつて存在しており、その系統に属しながらも、異同を示すものが西域北道に伝承されており、トカラ語 B 版はそれに基づいていたのかも知れない<sup>46</sup>。

<sup>43</sup> 《*Jātakamālā*》 IX.50: *prādurbabhūvuś ca sarāṃsi tasya tatraiva yatrābhicakāṅkṣa vāri* (Hanisch 2005: 85, II. 22-23) ‘And, where he longed for water, in those very places lotus-ponds appeared to his eyes’ (Speyer 1895: 82) とあり、水には困っていなかったことが窺える。

<sup>44</sup> 『太子須大拏経』では、Vessantara 一行は Śakra によって現出された城郭には立ち寄らず、ソグド語のものとは異なっている。SI 2962-2 + SI 2998-8b3 には城郭への滞在が明示されておらず、この点を確定し難いが、前節での筆者の解釈が正しければ、一行は城郭に滞在していたと推定される。また、トカラ語 B 版は《*Vessantara-jātaka*》の全体を訳したというよりは、重要な部分を抄訳した形になっており、説話或いは布施行に関する物語を集成したものの一部であった可能性が指摘される。

<sup>45</sup> Yoshida (2013) は漢訳『太子須大拏経』との関連を、一方 Durkin-Meisterernst (2009) は漢訳原典を否定し、インド語原典との関連を重視している。また、Durkin-Meisterernst (2016: 160) では、ソグド語版作成者は書かれたテキストには基づいていなかった点を指摘する。なお、トカラ語 B 版の内容を体系的に復元できないため、ソグド語版とトカラ語 B 版との関係及び両者が共通のインド語版に由来するか否かについては判断できない。

<sup>46</sup> 荻原 (2013) では、既知のサンスクリット及び漢訳仏典とも一致しないトカラ語 B 仏典の存在を指摘した。ただし、既知のものとは一致しない原因を全て、未知の版本に帰するのは妥当ではない。ここで検討したトカラ語 B 版《*Vessantara-jātaka*》が、《*Jātakamālā*》や『破僧事』・『薬事』といった複数のインド語版をも参照した上で、類似の物語から関連する描写を引用し、増広された可能性も否定されない。例えば、同じく子供の布施が語られるトカラ語 B の《*Araṇemi-jātaka*》において、婆羅門への布施に際する子供の発言は《*Vessantara-jātaka*》と良く一致する (cf. B83.6)。なお、筆者によるトカラ語 B の律典研究によれば、ムルトゥクを含むトゥルフアン地域将来のトカラ語 B 律蔵文獻は、根本説一切有部に比定される (Ogihara 2015b)。仮にトカラ語 B 版《*Vessantara-jātaka*》がインド語版に基づいていたならば、根本有部との関係が想定され、この点は『破僧事』・『薬事』所収の《*Vessantara-jātaka*》にマーンドリの嘆きが語られる点も参考になる。

## 6. ブラーフミー文字表記古代ウイグル語クチャ仏教史断片

クチャを中心に西域北道一体に拡大していった所謂トカラ仏教は、東のショルチュクやトゥルフアンで、この地域に進出してきた古代ウイグルの勢力と接触し、十世紀後半以降、マニ教徒であった古代ウイグル人の仏教への改宗に大きな役割を果たしたことが指摘されている。この事実は、古代ウイグル語に見られるインド語系の仏教用語が主にトカラ語を経由して借用されたと見られることや、複数の古代ウイグル語仏典の奥書にトカラ語仏典から訳された点が明記されていることから窺うことができる<sup>47</sup>。また、トカラ語仏典中には、古代ウイグル語仏典に対応する仏典の断片が存在しており<sup>48</sup>、ウイグル仏教の初期段階ではサンスクリットやトカラ語の仏典を利用して、彼らが西域北道で行われていた部派仏教を受容していたことが裏付けられる<sup>49</sup>。

一方、トカラ仏教から古代ウイグル仏教への仏教の伝播を示す資料は、残された文献の大部分が仏典であることから、両言語に残された仏典断片が中心となるが、古代ウイグル語文献にはクチャ仏教史を伝えたと思われる断片も知られており<sup>50</sup>、ここには古代クチャ国の王として名高い Svarṇapūṣpa (金花王) の名前が残されていた。また、トカラ語 B 仏典にも自らの歴史を語った断片が極少数残されており、興味深いことに、これらの断片は全てトゥルフアンで発見された後期の文献であることから、古代ウイグルとの関係が示唆される<sup>51</sup>。筆者は、ロシア所蔵のブラーフミー文字資料中、古代ウイグル語によって記されたクチャ仏教史に係わると見られる断片を一点発見することができた。本節では、この断片を紹介し、クチャ仏教と古代ウイグル仏教との関連を示す資料を付け加えたい。

当該の断片は SI 3752 (= SI Kr. VIII/6(1)) の所蔵番号を有する発見場所不明の folio 断片で、表面は古代ウイグル語が、裏面はトカラ語 B が両面ともブラーフミー文字によって書かれている<sup>52</sup>。サイズは約横 10.9cm×縦 6.3cm で、古代ウイグル語面は仏典書写に使用される文

<sup>47</sup> 古代ウイグル語《Maitrisimit》・《Daśakarmapathāvadānamālā》は、奥書にトカラ語仏典から訳されたことを明記しており、トカラ語 A《Maitreyasamitinātaka》は、トカラ語文献学の草創期に古代ウイグル語《Maitrisimit》との関係が指摘されて以降、現在に至るまで対照研究が行われている。また、後者については、近年対応するいくつかの物語のトカラ語断片の存在が指摘されているが、いずれも奥書を有しておらず、当該作品への帰属の確定には至っていない。なお、筆者は、ロシア所蔵トカラ語 B 断片 SI 2943-4 (= SI B 16-12) が《Daśakarmapathāvadānamālā》に語られる《Hariścandrāvadāna》に比定されることを発見した。この断片については、Ogihara (2018) を参照。

<sup>48</sup> 《Araṇemi-jātaka》として知られるトカラ語仏典は、古代ウイグル語訳だけでなく、ソグド語やトゥムシュク語による断片の存在が指摘されており、西域北道におけるトカラ語仏典の影響を窺うことができる。なお、上で言及した《Daśakarmapathāvadānamālā》所収の物語についても、ソグド語やトゥムシュク語断片が知られており、ソグド語のものは《Daśakarmapathāvadānamālā》への帰属が断片中の記載から確定される。

<sup>49</sup> 古代ウイグル勢力による西域北道制圧後も、トカラ語がウイグル仏教において少なくとも十一世紀頃まで仏教言語として威信を有していたと見られる点は、荻原 (2014・2016b) や荻原・慶 (2017) で指摘した仏教石窟に書かれたトカラ語銘文からも窺える。

<sup>50</sup> クチャ仏教史に関連すると見られる古代ウイグル語断片については、森安 (2004) を参照。また、笠井 (2006) も、トカラ語から古代ウイグル語に翻訳された註釈文献について論じている。

<sup>51</sup> TochSprR(B) II: 276-287 で出版された B415-432 が歴史文献として扱われているが、この内、唯一クチャ発見とされる B431 は比喩譚に比定されることを荻原 (2016b, 2016c) で指摘した。

<sup>52</sup> 本断片は folio の右端に相当し、葉数が記される左端を残していないため、表裏を確定することができず、また内容からも判断が困難なため、暫定的に(a)面と(b)面とした。

字で丁寧に書かれているが<sup>53</sup>、裏面のトカラ語 B はかなり崩れた文字で書かれている。トカラ語 B 面には 3 行残されているが、最初の行と残り 2 行では筆跡が異なっており、また 3 行目以降の部分は空白になっている。断片は folio の右端の部分に相当し、右端の余白部分が残されている。ここでは、ウイグル語面のみ Maue (2015) による転写方式に従った。

### Transliteration

(a)

- 1 [...] c[] ndrā va su a rha-nt d<sup>h</sup>yām kyo zyum kyo ryu-p
- 2 [...] [l]ya ki tu rgā[-]yā a ntā kem kyu syām ulu-š
- 3 [...] k[?]yā<sup>[1]</sup> tyā ki b<sup>h</sup>e<sup>[2]</sup> syā ki zoṃ bya klyā rbo lri [·]
- 4 [...] k[?]y[] zso g<sub>1</sub>u lu-r hk[?][<sup>[3]</sup>] ri y[?][<sup>[4]</sup>] [+]

(b)

- 1 /// - -<sup>[5]</sup> (·)sw· || [BLANK]
- 2 /// mem [n]auš<sup>[6]</sup> kante [śa]<sup>[7]</sup> pikwala kāt[au šey]<sup>[8]</sup> - -
- 3 /// (·)m· k<sub>a</sub> r·(·)<sup>[9]</sup> nau<sup>[10]</sup> || nano wil[ts]e [š]e<sup>[11]</sup> s[l]ai tā[ka a] - (·)[s]·

### 注釈

- (1) 恐らくは kyā とするべきと思われる。
- (2) この <bhe> の下には、細字で修正が書かれているが、まず <-š> とあり、その下にブラーフミー文字の数詞で <70><5> とあることから、<bhe> を <bhe-š> とした上で、さらに <75> と注記したものと推定されるが、修正後の本文は *bheš syākiz om* となり、これは古代ウイグル語 *bäs säkiz on '75* と解釈され、行間に追加された <75> と正しく一致している。
- (3) 或いは hv[?][<sup>[1]</sup>] かも知れないが、この akṣara の上には付加母音は見られない。
- (4) 或いは bh[?][<sup>[1]</sup>] かも知れないが、この akṣara の上には付加母音は見られない。
- (5) この部分は akṣara の下部のみが残存し、<a, cu, pu, šu> のいずれかの可能性が高い。
- (6) 期待される語形は <nauš<sub>1</sub>> である。
- (7) 文脈から śa(k) '10' の書き誤りと考えられる。
- (8) 磨滅が激しく、解読が困難だが、<ya> には付加母音は見られない。
- (9) この akṣara の上には付加母音は見られない。
- (10) この akṣara は、或いは <tau> かも知れない。
- (11) この akṣara は、或いは <ple> かも知れない。

### Transcription

(a)

- 1 [...] c[a]ndravasū<sup>[1]</sup> arhant dyan kōzūn kōrūp
- 2 [...] [t]āgi turgay antagin kūsān uluš
- 3 [...] k<sub>a</sub> tāgi bā(š) sākiz on bāglār boldī ·
- 4 [...] k[?]y[z] sokulur k[?][<sup>[1]</sup>] ri y[?][<sup>[1]</sup>] [+]

<sup>53</sup> この面に書かれた文字は、Sander (1968: 182-183, Tafel 29-40) に従えば North Turkestan Brāhmī, Type b に分類されるが、この字形は Sander (2005[2009]: 135) によれば九世紀以降とされる。



(b)

1 /// - - (·)sw· || [BLANK]

2 /// *mem nauś kānte śa(k) pikwala kātkaū şey - -*3 /// (·)m· *kā r(·)· nau*<sup>[2]</sup> || *nano wiltse śle slai tāka*<sup>[3]</sup> *a - (·)s·*

## 注釈

(1) 阿羅漢の名前が記されているが、同じ人名がムウルトゥク発見のドイツ所蔵トカラ語 B 断片 B418 にも阿羅漢の名前として在証されることから、この部分は *c(a)ndrāvasu* と復元され、同一人物を指すと考えられる。

(2) この部分は *m(ā) kār(sa)nau* 「私は知らない」と復元できるかも知れない<sup>54</sup>。

(3) この部分の *śle slai tā ka* は正確に解釈することはできず、暫定的に *tāka* を *nes-* ‘to be’ の過去形三人称単数能動態と見做した。

## 和訳

(a)

1 [...] 阿羅漢 Candrivasu の禅定を自らの目で見て

2 [...] まで(?)留まるだろう。このように、クチャ国

3 [...] まで 75 人のベグになった(或いは「ベグがいた」)<sup>[1]</sup>。4 [...] 潰される(?)<sup>[2]</sup> [...]

(b)

1 {和訳不能}

2 [...] から(?)、既に 110 年が過ぎた<sup>[3]</sup>。 [...]

3 [...] 私は知らない(?)。さらに、千 [...] があつた。 [...]

## 注釈

(1) 上記転写に対する注釈で言及したように、行間の追記部分を加えて、数詞を「75」としている。

(2) 語根を Clauson (1972: 809b) に見られる *sokul-* ‘to be crush’ と見做したが、*sugul-* ‘to sink’ の可能性も否定されない。

(3) 主語が *pikul* ‘year’ の複数主格形 *pikwala* ならば、動詞には複数形が要求されるが、後続する過去分詞・主動詞ともに単数形となっている。同様の現象は 2 行目の *tāka* でも確認されるため、この部分を書いた者はトカラ語 B に精通していなかった可能性がある。

残存部分が極めて少ないため、この断片からのみでは古代ウイグル語面の内容を復元することはできないが、前述のように阿羅漢 Candrivasu はトカラ語 B 断片 B418 にも確認されるため、関連する資料として、以下に筆者による当該断片の転写と解釈を提示する。本断片のサイズは、約横 6.8cm×縦 12.1cm である。なお、読みに若干の改善を行うことができたため、以下の転写は TochSprR(B) II: 279 のものとは異なる部分がある。

<sup>54</sup> 或いは *m(ā) kār(ka)nau* 「私は盗まない」とすることも可能だが、この部分は奥書の可能性もあり、文脈上不自然であるため、上のような推定が妥当と思われる。

Transliteration

- |   |  |
|---|--|
| (a)   | (b)  |
| 1 /// n· y[o]śaim̄ y[ā] <sup>[1]</sup> ///    | 1 /// ptaṣṣe taupem̄ tu ///                        |
| 2 /// kṛṭkālñemem̄ k <sub>v</sub> ś[īññ]· /// | 2 /// r(\\) klāmai <sup>[2]</sup> <ta>ne ñ(·)i /// |
| 3 /// lo candrāvasuṃ arha ///                 | 3 /// [ndr]āvasu arhānte tumem̄ ///                |
| 4 /// – tuñanma (·)[k]· ///                   | 4 /// – 2 kwri mā pānnāl(·)e <sup>[3]</sup> ///    |
| 5 /// lo aṣanīkem̄ (·)[k]· ///                | 5 /// (·)[c]· mpām̄ tu · yā ///                    |

注釈

- (1) TochSprR(B) II: 279 は/// [na]y[o] śaim̄ y[e] /// とするが、筆者は単数斜格形 *yośai* のみが在証される *yośa\** の複数斜格形 *yośaim̄* と解釈した<sup>55</sup>。また、後続する語は *yām-* ‘to do’ が推定されるが<sup>56</sup>、語形を確定することはできない。
- (2) <klā>には付加母音 <ai> が抹消されたような痕跡が見られる。
- (3) 或いは <ṣṭtāl(·)e> とすべきかも知れない。

Transcription

- |  |   |
|--|---|
| (a)  | (b)   |
| 1 /// n· yośaim̄ yā ///                          | 1 /// ptaṣṣe <sup>[4]</sup> taupem̄ tu ///      |
| 2 /// kṛṭkālñemem̄ k <sub>v</sub> śīññ(e) ///    | 2 /// r klāmai tane ñ(·)i ///                   |
| 3 /// (wa)lo candrāvasuṃ arha <sup>[1]</sup> /// | 3 /// (ca)ndrāvasu arhānte tumem̄ ///           |
| 4 /// – tuñanma (·)k <sup>[2]</sup> ///          | 4 /// – 2 kwri mā pānnāl(·)e <sup>[5]</sup> /// |
| 5 /// (wa)lo aṣanīkem̄ (·)k <sup>[3]</sup> ///   | 5 /// (·)c(a)mpām̄ tu · yā ///                  |

注釈

- (1) Toch.B *arhānte* ‘Arhat’ の格形或いは派生語が推定されるが、確定はできない。
- (2) 語形を確定できないが、*kāt-* ‘to sow’ が推定されるかも知れない。また、先行する *tuñe* ‘incense’ は、Ching (2015) によって意味が修正された。
- (3) *kwā-* ‘to invite’ の接続法或いは過去形の語幹から派生された形式を推定することができるかも知れない。
- (4) この語が後続する *taupem̄* を修飾するのであれば、TochSprR(B) II: 279, fn. 4 に指摘されるように、*ptaṣṣe(m)* と修正されるが、前後の文脈を欠いており、確定はできない。
- (5) この語に対しては、*pānn-* ‘to stretch’ から派生された *pānnāl(l)e* 或いは *pānnāl(ñ)e*、また *pātt-* ‘to climb’ から派生された *pāttāl(l)e* 或いは *pāttāl(ñ)e* が推定される。

和訳

- |                   |                            |
|-------------------|----------------------------|
| (a)               | (b)                        |
| 1 [...] を行う [...] | 1 [...] 仏塔の [...] 鉦山 [...] |

<sup>55</sup> Adams (2013: 556) は *yośiye\** を語幹として設定するが、慶 (2017: 382) に従い、*yośa\** とした。また、語義は ‘irrigation’ と考えられていたが、漢文文書との比較を行った前掲慶の研究によって「行政組織によって課せられる何らかの課役」とする解釈に、筆者は妥当性を認めたい。

<sup>56</sup> Pinault (1998: 8) に指摘されるように、フランス所蔵のトカラ語 B による世俗文書には、単数斜格形 *yośai* が動詞 *yām-* ‘to do’ の補語になっている例が指摘されている。

- |                                |                                    |
|--------------------------------|------------------------------------|
| 2 [...] 通り過ぎてからクチャの [...]      | 2 [...] 私は [...] を齎した。ここで [...]    |
| 3 [...] 王は阿羅漢 Candravasu [...] | 3 [...] 阿羅漢 Candravasu はそれから [...] |
| 4 [...] 香を散ずる(?) [...]         | 4 [...] //2// もし [...] ないならば [...] |
| 5 [...] 王は尊者を呼ぶ(?) [...]       | 5 [...] それを [...] することができる。 [...]  |

このように、SI 3752 と B418 は、共に Candravasu という名前の阿羅漢とクチャに言及する点で共通している。ただし、二断片とも欠落が大きく、相互の内容理解に直接貢献するとは言い難いが、トカラ語 B と古代ウイグル語という異なった言語で書かれた断片に共通する人物と地名が言及される点は、ウイグル人がトカラ語 B 断片 B418 を含む写本で語られていた物語を自らの言語でも伝えていたことを示唆し、古代ウイグル人の仏教への改宗過程で、クチャを中心とした西域北道の在地仏教が果たした歴史的役割を窺わせる。

また、これまでも古代ウイグル語文献には、森安 (2004) で紹介されたようなクチャ仏教史に関連する断片が知られており、そこにはトカラ語文献にも在証される人名への言及が見られたが、そこに見られるトカラ語と古代ウイグル語に共通した人名は Svarṇapuṣpa (金花王) というクチャ国王のみであった。一方、SI 3752 と B418 は共に Candravasu という阿羅漢に言及していることから、この阿羅漢はクチャ仏教史上において重要な人物であったと考えられるだけでなく、SI 3752 の内容から Candravasu はウイグル人によるクチャ征服の際に在世しており、ウイグル人と接触し、何らかの形で仏教についてウイグル人に示すところがあったと見られる。ここで興味深いのは、暫定的に裏面としたトカラ語 B 部分に「既に 110 年が過ぎた」という記述が見られる点である。古代ウイグル語面との関連は明らかにし得ないが、想像を逞しくすれば、これは筆写した人物がウイグル語面の内容を読み、「書写した時点から遡ること 110 年」という意味であったかも知れない。

さらに、クチャ仏教史に関連する古代ウイグル語文献は、これまでウイグル文字で書かれた文献に限定されていたが、SI 3752 はブラーフミー文字で書かれており、クチャ仏教史に関する最初のブラーフミー文字表記の古代ウイグル語断片である点は特筆に値する。ウイグル仏教文献において、ウイグル文字の他にブラーフミー文字で書かれた文献が数多く存在する点は既に知られており<sup>57</sup>、ドイツ所蔵のものは校訂出版されているが<sup>58</sup>、この二つの文字を使用していた仏教勢力のウイグル仏教における関係や歴史的な位置づけ、また背景などについては未だ不明な点も多く、今後解明されるべき重要な課題となっている。これらの問題の解決に対しても、SI 3752 は重要な資料であると言えるだろう。

なお、ここで見たトカラ仏教と古代ウイグル仏教との関係に関連して、新しい資料を紹介する。トカラ語 B に対して古代ウイグル語を対置させたバイリンガルの断片は Maue

<sup>57</sup> ウイグル文字表記古代ウイグル語文献にもブラーフミー文字で書かれた部分が存在しており、ドイツ所蔵のこの種の文献については、筆者も作業に協力した Kasai (2017) で体系的に校訂出版された。

<sup>58</sup> ドイツ所蔵のブラーフミー文字表記古代ウイグル語文献については、Maue (1996, 2015) を参照。なお、Maue (2015: 499-512) にはトカラ語 B・古代ウイグル語によるバイリンガルの断片の解釈が与えられており、これらは以下に紹介するロシア所蔵断片と同様に、トカラ仏教と古代ウイグル仏教との関係を直接示す資料と言える。

(2015: 499-512) で出版された 4 点だけが知られており、その他のコレクション中に同種の断片が存在する点は指摘されたことがないが、ロシア所蔵ブラーフミー文字資料中に、筆者は漢文仏典の紙背を利用したトカラ語 B・古代ウイグル語によるパイリンガルの断片を 8 点見出した。残念ながら、これらの断片の内容を比定するには至っていないため、正確な解釈を与えることはできないが、当該断片の解釈の進展を願い、この領域に関心を有する研究者に現時点での到達点を紹介する。断片の転写方式は、Maue (2015) に従っている。

SI 3718 + SI 3716-6 + SI 3716-6<sup>59</sup>

本断片は漢文仏典の紙背を利用した 4 点の断片から成っており、表面の漢文によって相対的な位置を推定することが可能である<sup>60</sup>。この内、SI 3718 と SI 3716-6 は直接接合することが明らかであるが<sup>61</sup>、SI 3718 + SI 3716-6 と SI 3716-6 の間の欠落は、漢文面によって推定した。なお、漢文面の比定により、ブラーフミー文字面から見て SI 3716-6 は当該断片のほぼ右端に相当するが、SI 3718 + SI 3716-6 は SI 3716-6 よりも左側に位置しており、両者の間には最も少ない箇所でも 1-2 aksara 程度の欠落が存在していると見られる。各断片のサイズは、SI 3718 + SI 3716-6 = 約横 10.5cm × 縦 9.0cm、SI 3716-6 = 約横 9.0cm × 縦 10.5cm、SI 3718-(1) = 約横 1.5cm × 縦 1.6cm である。本断片で用いられているブラーフミー文字は仏典書写に見られるものではなく、行間に書かれるグロスや修正などと同様に、細い筆記具で小さく書かれている。

Transliteration

SI 3718 + SI 3716-6

- 1 [...] + [?][u<sup>[1]</sup>][...]
- 2 [...] a mpa lyi škai • nā<sup>[2]</sup> +<sup>[3]</sup> [...]
- 3 [...] [?]k̄[] r[] [?]k̄[] • a ru hrā y[] [...]
- 4 [...] ḡi nā • mā ma nta-ṣ̣ [...]
- 5 [...] + mā e nka sta-r̄ • ra [...]
- 6 [...] [?][m]-c • ka nta na nta-r̄ • sya<sup>[4]</sup> r̄[?][<sup>[5]</sup>][...]
- 7 [...] + śi lā + [?][] s[?]o-+ + [...]

SI 3716-6

<sup>59</sup> 以前の登録番号は、SI 3715-3718 (= SI Kr. VII/1b, d, g) 及び SI 3754 (= SI Kr. VIII/6(3)) である。

<sup>60</sup> 漢文面は、『大般若波羅蜜多經』卷二六六 (T06, no. 220, 345c08-19) に比定される。なお、Maue (2015: 507-510) で出版されたトカラ語 B・古代ウイグル語によるパイリンガルの断片 U6855 は、ここで扱っている SI 3718 + SI 3716-6 + SI 3716-6 と同様に『大般若波羅蜜多經』に比定されている。対応を確認したところ、U6855 の漢文面に対応する本文は『大般若波羅蜜多經』には複数在証されるため、正確な対応を確定することは困難であるが、SI 3718 + SI 3716-6 + SI 3716-6 に後続する 345c19-22 にも同様の本文が在証され、同一断片に属していた可能性がある。ただし、U6855 は漢文面では下縁に相当しており、筆者が推定した位置とは一致しない。

<sup>61</sup> SI 3716 には 7 点の断片が収められており、漢文面に使用される文字の類型によって、キリル文字で枝番号が付されているが、同一の枝番号を持つものについては、さらに細かい枝番号は与えられてない。また、SI 3718 には同一の筆跡によって書かれたと見られる小断片があるが、誤った位置に接合されており、ここでは暫定的に SI 3718-(1)とした。この小断片の表面には漢文が書かれていないため、位置を推定することができない。

- 1 [...] pi [?]ku a d<sup>h</sup>[ ] mi-š [?][ ]m[ ] [...]
- 2 [...] wa ññe • tu wā-k̄ • ta<sup>[6]</sup> wa sa • tyo + [...]
- 3 [...] pa ñā skai • ci<sup>[7]</sup> lā pci • wa rtse • ke-ñ • [...]
- 4 [...] + ku ri ške ne • a wā stā<sup>[8]</sup> • rā tre śśe [...]
- 5 [...] -g<sub>1</sub> yā ñli-g<sub>1</sub> mo ra-p • kya ñryā-k || [...]
- 6 [...] pra st<sup>h</sup>am̄ • ś[ ]-ñ • še sa sma ññe + [...]
- 7 [...] + [ ]o + nam<sup>[9]</sup> nā [ ]i pra st<sup>h</sup>o-l • a-z [ ]i [...]
- 8 [...] r[ ]i [ ]ā [ ]i {+ +} s[ ]i yā ye [ ]o [ ]i [...]

SI 3718-(1)

- 1 [...] si r<sup>k̄</sup>i<sup>[10]</sup> [...]

注釈

- (1) 或いは、-l かも知れない。
- (2) 行間に<na>と書かれており、<nā>に対する修正と考えられる。
- (3) この akšara は w[ ]、w[ ]i、l[ ]のいずれかかも知れない。
- (4) 或いは、syu かも知れない。
- (5) 或いは、m[ ]かも知れない。
- (6) 或いは、na かも知れない。
- (7) 或いは、vi かも知れない。
- (8) 或いは、snā かも知れない。
- (9) 或いは、ta 又は tam かも知れない。
- (10) 或いは、r<sup>k̄</sup>o 又は r<sup>k̄</sup>au かも知れない。

Transcription

- 1 [...] + [ ]u [...]
- 2 [...] ampalyiškai<sup>[1]</sup> • na + [...]
- 3 [...] [ ]tk[ ] r[ ] [ ]k[ ] • a ru hrā y[ ] [...]
- 4 [...] giŋa • māmantaš<sup>[2]</sup> [...]
- 5 [...] + mā eñkatar<sup>[3]</sup> • rā [...]
- 6 [...] [ ]m[ ]c • kantanantar<sup>[4]</sup> • sār[ ] [...]
- 7 [...] + śi lā + l[ ] s[ ]o-+ + [...]
- {ll. 8-10 missing}
- 11 [...] pi [?]ku a d[ ] miš [?][ ]m[ ] [...]
- 12 [...] waññe<sup>[5]</sup> • tuwak • ta wa sa • tö + [...]
- 13 [...] pañāškai<sup>[6]</sup> • čilapčı • wartse<sup>[7]</sup> • kiŋ • [...]
- 14 [...] + kuriškene<sup>[8]</sup> • awāstā<sup>[9]</sup> • rätreśśe<sup>[10]</sup> [...]
- 15 [...] [munda]g yaŋlɨg morap • kãŋrãk || [...]
- 16 [...] prast<sup>h</sup>am̄<sup>[11]</sup> • ś[ ]ŋ • şesa smaññe<sup>[12]</sup> + [...]
- 17 [...] + [ ]o + nam̄ nā [ ]i prast<sup>h</sup>ol<sup>[13]</sup> • az [ ]i [...]

18 [...]r[?i] [?ā] [?i] {+ +} s[?i] yā ye [?o] [?i][...]

SI 3718-(1)

1 [...] *sırkı* [...]

注釈

転写中の 13 行目の対応から、先行するトカラ語 B に対して、対応する古代ウイグル語を続けて併記していたと考えられる。

- (1) トカラ語 B の指小辞-*ske* の女性形-*ska* によって派生した名詞の単数斜格形であり、語根は *ampalyi*\* と推定されるが、この語形はこれまで知られていない。
- 1.3: 行末の *a ru hrā y*[...] は、インド語に由来するトカラ語 B と推定されるが、原語を確定できない。
- (2) Toch.B *mānt-* ‘to stir (up), destroy, be angry’ の過去分詞男性単数斜格形・複数主格形と解釈されるが、期待される語形は *mamāntas* であり、母音の長短に問題がある。
- (3) Toch.B *mā* ‘not’ 及び動詞 *enk-* ‘to take, seize’ の二人称単数現在中動態の形式と解釈される。
- (4) Toch.B *kānt-* ‘to rub (away)’ の二人称単数現在中動態の形式と解釈される。
- (5) トカラ語 B の形容詞・抽象名詞派生接尾辞-*nñe* を伴った形式であるが、語幹部分が欠落している<sup>62</sup>。なお、後続する *ta wa sa* もトカラ語 B と推定されるが、解釈できない。
- (6) 初出の形式であり、トカラ語 B の指小辞-*ske* の女性形-*ska* によって派生した名詞の単数斜格形であるが、先行部分の欠落により語幹を正確に推定できない。なお、後続する古代ウイグル語 *čilapçı* も解釈できない。
- (7) Toch.B *wartstse* ‘broad, wide’ の男性単数主格形であり、後続する古代ウイグル語 *kiñ* ‘broad, wide’ が対応している。
- (8) 初出の形式であり、トカラ語 B の指小辞-*ske* を伴った名詞の処格形で、先行部分に欠落がなければ、語幹は *kuriske*\* と推定されるが、語義は不明である。
- (9) この読みに問題がなければ、Skt. *avasthā-* ‘state, position’ の借用語かも知れない。
- (10) 初出の形式であり、類似の語形からトカラ語 B の形容詞 *ratre* ‘red’ に接尾辞-*ešce* を附して派生された名詞と推定されるが<sup>63</sup>、前後の文脈の欠落もあり、確実な解釈を提示できない。
- 1.15: 古代ウイグル語(*munda*)*g yañlıg* ‘in this way’ 或いは(*anda*)*g yañlıg* ‘in that way’ と解釈される。また、*kānrāk* は Maue (1996: 48) で出版されたバイリンガルの文書中、Skt. *murava-* ‘a kind of drum’ に対応している。一方、*morap* については解釈できない。
- (11) Skt. *prasthāna-* ‘departure, walking, departing this life’ の借用形と推定される。
- (12) トカラ語 B の前置詞 *šesa* ‘together’ に、*smaññe* ‘broth’ が後続している形式であり、前者が後者を支配しているならば、後者の共格形 *smaññe(mpa)* が推定される。

<sup>62</sup> 後続する <*tuwā-k*> が古代ウイグル語ではなく、トカラ語 B を表記していたのならば、*tuwak* という形式は指示代名詞 *su* の中性単数主格・斜格形に強意の小辞 *k(a)* が附された形式と解釈され得る。

<sup>63</sup> Adams (2013: 643-644) は、*wāntareše* ‘royal official’ は接尾辞-*ešce* によって *wāntare* ‘thing, affair’ から派生されたと推定される点に言及している。

- (13) 語中の<<sup>h</sup>>の存在からサンスクリットからの借用語と推定されるが、原語を確定できない。なお、後続する古代ウイグル語 *az* は名詞‘greed’或いは形容詞‘a little’と考えられるが、先行部分を解釈できないため、いずれかを確定できない。

#### SI 3715-B + SI 3716-B + SI 3754 + SI 3717-(6)

本断片は漢文仏典の紙背を利用した 4 点の断片から成っており、表面の漢文によって相対的な位置を推定することが可能である<sup>64</sup>。いずれも直接接合はしないが、筆者の推定が正しいならば、ブラーフミー文字面から見て、全て当該断片のほぼ左端に相当する。それぞれの断片の間の欠落は、漢文面によって推定される<sup>65</sup>。なお、各断片のサイズは、SI 3715-B = 約横 6.8cm × 縦 15.3cm、SI 3716-B = 約横 7.7cm × 縦 8.8cm、SI 3754 = 約横 8.0cm × 縦 8.8cm、SI 3717-(6) = 約横 4.8cm × 縦 3.4cm である。本断片で用いられているブラーフミー文字も仏典書写に見られるものではなく、行間に書かれるグロスや修正などと同様に、細い筆記具で小さく書かれている。

#### Transliteration

##### SI 3715-B

- 1 [...] [?] [ ] yu kyā ni rri • e rk [ ] [...]
- 2 [...] + + + • si mg<sub>1</sub>ā yā g<sub>1</sub>u hom [ ] [...]
- 3 [...] lg<sub>1</sub>ā li • sa-rk • a r<sub>k</sub>ā si ndā<sup>[1]</sup> [...]
- 4 [...] l [ ? ] [ ] r<sub>k</sub>yā li • wa wā ntsa ñe • bhyo gci • + [...]
- 5 [...] s [ ? ] [ ] k [ ? ] [ ] + { + } • te saṃ ṣa ra • ya rri k<sup>h</sup>ci • o [...]
- 6 [...] [ ? ] s [ ] { + + + + + } -r spa rtta ñe • mo ñ [ o ] [...]
- 7 [...] [ ] [ ? ] i • lpo tt [ ]<sup>[2]</sup> [ ? ] k [ ] • tai tt<sup>[3]</sup> g<sub>1</sub>ci • lu wa kwā t [ ]<sup>[4]</sup> [...]
- 8 [...] + i ški rtti • p<sub>a</sub> rsa-nt • [...]
- 9 [...] yyu-ñ u<sup>[5]</sup> rmi-ṣ kyu syāṃ s [ ] +<sup>[6]</sup> [...]
- 10 [...] p [ ? ] [ ] l [ ? ] e tt [ ]<sup>[2]</sup> • to k<sub>i</sub> mā-k̄ • śa-k̄ • se-g<sub>1</sub> • wa l<sub>a</sub> + [...]
- 11 [...] + ya { + + + + + } + + ka ñi t [ ] [...]

##### SI 3716-B

- 1 [...] ska lñe • yā mā-hk̄ [...]
- 2 [...] • bi lykā mi • uyu ndyu rti • plyaṃ si • [ ? ] s [ ] [ ? ] tk [ ? ] [ ] [...]
- 3 [...] śaṃ nti<sup>[7]</sup>-k̄ myā-k̄ • ka ntsa<sup>[8]</sup> taṃ • bi cmā-k̄ [...]
- 4 [...] n [ ] [ ]<sup>[9]</sup>-r • tyu tyo-r lyā-r tyu tyo-r lyā- { + } [...]
- 5 [...] sa rkne • cā si ndā • mo ri ñk [ ? ] i [...]

<sup>64</sup> 漢文面は、『光讚経』巻二 (T08, no. 222, 163b12-c01) に比定される。

<sup>65</sup> SI 3715 には 7 点の断片が収められており、漢文面に使用される文字の類型によって、キリル文字で枝番号が附されているが、同一の枝番号を持つものについては、さらに細かい枝番号は与えられてない。また、SI 3717 には 15 点の断片が収められており、その内の 4 点に SI 3715 及び SI 3716 と同様の基準により枝番号が附されているが、残りの 11 点には枝番号が附されていないため、筆者によって与えられた枝番号を利用し、ここでは暫定的に SI 3717-(6) とした。この小断片の表面にも漢文が書かれているが、比定箇所頻りに現れる語彙のみが読み取れたため、位置を推定することができない。

6 [...]l[?]ai t[?]o +-r • pi lyā ki ny[] [...]

SI 3754

1 [...] + [?][ky]<sup>[10]</sup> + [?][yu [?][y[] + [...]

2 [...] +<sup>[11]</sup> ci • k<sub>a</sub> r<sub>ṣ</sub>a lyā na • yyo lyā nyō • ke s[<sup>[12]</sup> [...]

3 [...] [?]p[] lyā lya {+} + + • syu nyu pa śim • śu tka ske [...]

4 [...] lñe wa [?]ñai • tu tmā-hk d<sup>h</sup>ā ṽlā d<sup>h</sup>i • s[] [...]

5 [...] lko<sup>[13]</sup> • tyu nyu-r pyu śyo-z • ca pe-m ya + [...]

6 [...] + pyu rlyā-r • pra mā tta • kī ghū-t • yā p<sub>a</sub> ñe • [...]

SI 3717-(6)

1 [...] -g<sub>1</sub> • le wpām + + [...]

2 [...] + ko • sya [?]lm[] {+} [?][u]<sup>[14]</sup> {+ +} + [...]

注釈

(1) 或いは、nda かも知れない。

(2) 或いは、n[?]かも知れない。

(3) 或いは、nti かも知れない。

(4) 或いは、n[e, n[ai, t[ai かも知れない。

(5) 或いは、ru かも知れない。

(6) この akṣara は、[?]k̄[] 又は [?]g<sub>1</sub>[] かも知れない。

(7) 或いは、tī かも知れない。

(8) 或いは、ttsa かも知れない。

(9) この akṣara は、nta かも知れない。

(10) 或いは、[]yu 又は []u かも知れない。

(11) この akṣara は、<a>、<pu>、<mu>、<ṣu>のいずれかかも知れない。

(12) 或いは、g[] かも知れない。

(13) 或いは、lkau かも知れない。

(14) 或いは、[?]tr[] かも知れない。

Transcription

SI 3715-B + SI 3716-B + SI 3754

1 [...] [?][ü] kā ni ri • erk[] [...]

2 [...] + + + • sī m<sub>ga</sub> ya gu hon [...]

3 [...] lgalī • sark<sup>[1]</sup> • arkasinda [...]

4 [...] l[?][rkāli • wawāntsañe<sup>[2]</sup> • böğçī • + [...]

5 [...] s[?][] k[?][] + {+} • te saṃ ṣa ra<sup>[3]</sup> • yarıkçı • o [...]

6 [...] [?]s[] {+ + + +} r sparttañe<sup>[4]</sup> • mo ñ[?]o [...]

7 [...] [][?]i • lpo t[?] [?]k[] • taytığçı • luwa<sup>[5]</sup> kwā t[e [...]

8 [...] + işgirti • pārsan<sup>[6]</sup> • [...]

9 [...] yūñ urmiš kūsāns[] + [...]



- 10 [...]p[?][ ] t[?]e tt[ ] • tokımak • śak<sup>[7]</sup> • sıg • walä + [...]
- 11 [...] + ya {+ + + + +} + + ka ñi t[ ] [...]  
 {l. 12 missing}
- 13 [...] skalñe<sup>[8]</sup> • yamak [...]
- 14 [...] • bi lykā mi • ündürti • plyaısi<sup>[9]</sup> • [?]s[ ] [?]tk[?][ ] [...]
- 15 [...] śamñtikmāk • kantsatam<sup>[10]</sup> • bıçmak [...]
- 16 [...] -n[tä]r<sup>[11]</sup> • tütörlär tütörlä[r] [...]
- 17 [...] sarkne<sup>[12]</sup> • učasında • mo ri ık[?]i [...]
- 18 [...] l[?]ai t[?]o + r • pi lyā ki ıı[ ] [...]  
 {ll. 19-20 missing}
- 21 [...] + [?][ ]ky[ ] + [?][ ]ü [?][ ]y[ ] + [...]
- 22 [...] + ċi • kārşälyana<sup>[13]</sup> • yöläñö • keś[ ] [...]
- 23 [...] [?]p[ ] lä lä {+} + + • sü ıü pa śın • śutkaske<sup>[14]</sup> [...]
- 24 [...] [enka]ñe wa[r]ñai<sup>[15]</sup> • tutmakda uladı • ś[ ] [...]
- 25 [...] lko • tünür püşöz • capem<sup>[16]</sup> ya + [...]
- 26 [...] + pürlär • pramätta<sup>[17]</sup> • kıgut • yäpäñe<sup>[18]</sup> • [...]

SI 3717-(6)

- 1 [...] g • le wpām + + [...]
- 2 [...] + ko • sä [?]lm[ ] {+} [?][ ]u {+ +} + [...]

## 注釈

転写中の 3 行目・17 行目・24 行目の対応から、先の断片と同様に、先行するトカラ語 B に対して、対応する古代ウイグル語を続けて併記していたと考えられる。

- (1) Toch.B *sark* ‘back (of the body)’の主格・斜格形と解釈されるが、後続する古代ウイグル語 *arkasında* が「その背中において」と解釈されるため、ここでは *sark* は斜格の形式と推定される。
- (2) Toch.B *wawāntsañe* は初出であるが、名詞 *wapāntsa* ‘weaver’に形容詞・抽象名詞派生接尾辞-ñeを伴った形式と理解される。なお、後続する古代ウイグル語 *bögçi* は *bög-* ‘to pile up, accumulate’に名詞派生接尾辞-çiが附された形式かも知れない。
- (3) トカラ語 B による箇所と考えられるが、冒頭の *te* が代名詞 *se* の単数中性主格・斜格形と見られる以外に、正確に解釈することはできない。また、後続する *yarıkçi* は *yarık* ‘amour’に名詞派生接尾辞-çiが附された形式と思われるが、先行するトカラ語 B との対応関係を確定できない。
- (4) Toch.B *spartañe* は動詞 *spärtt-* ‘to turn (intr.)’の Gerundive II より派生された抽象名詞であるが、ここでは後期トカラ語 B の音変化として Peyrot (2008: 64-65) が指摘する -lñ- > -ñ(ñ)-を示している。
- (5) Toch.B *luwo* ‘animal’の単数斜格形 *luwa* と解釈されるが、後続するトカラ語 B の語形を確定できない。また、先行する古代ウイグル語は、語幹 *taytig* に名詞派生接尾辞-çiが附さ

れた形式と思われるが、語幹を解釈できない。

- (6) Toch.B *pärsant* は初出であり、語義を確定できないが、動詞 *pärs-* ‘to sprinkle, splash’ と関係づけられるかも知れない。なお、先行する古代ウイグル語は *išgirti* ‘brocade’ と推定される。
- 1.9: 古代ウイグル語 *urmiš* は、動詞 *ur-* ‘to set, place’ の形動詞と考えられる。
- (7) Toch.B *śak* ‘ten’ に対して、後続する古代ウイグル語が *sig* ‘low’ と解釈されるならば、この箇所の対応関係は理解に困難が伴う<sup>66</sup>。また、先行する *tokmak* は動詞 *toki-* ‘to beat’ の動名詞と理解される。なお、行末の *walä* は Toch.B *wäl-* ‘to curl (tr.)’ の現在形或いは接続法に属する語形と推定される。
- (8) 古代ウイグル語の語形の語義を確定できないため、先行するトカラ語 B の語形に対して確実な推定を行い得ないが、動詞の Gerundive から派生された抽象名詞と考えられる。
- (9) Toch.B *plānk-* ‘(K) to sell’ の不定詞と解釈される。また、先行する *ündürti* は、動詞 *ündür-* ‘to bring forth, produce’ の三人称単数過去形と考えられる。
- (10) 初出の語形ではあるが、Toch.B *kānts-* ‘to sharpen, file’ に関係づけられる。後続する古代ウイグル語 *bičmak* は動詞 *bič-* ‘to cut’ の動名詞と解釈されるが、トカラ語 B には *-tam* という接尾辞は知られていないため、<taṃ>は<te>の書き誤りであり、*kantsate* であったとすれば、当該動詞の三人称単数過去中動態の形式となる。なお、先行する *śamntikmäk* は、*śantik* ‘appeasing’ (<Skt. *śāntika-* ‘producing ease’) より形成された動名詞かも知れない。
- (11) 後続する *tütörlär* が動詞の三人称複数現在形であるため、先行するトカラ語 B は三人称複数現在・接続法中動態の語尾 *-n(tä)r* と推定される。また、古代ウイグル語の動詞は *tütür-* ‘to fight (направлять)’ かも知れないが、対応するトカラ語 B の語形を確定できない。
- (12) Toch.B *sark* ‘back (of the body)’ の処格形と解釈され、後続する *učasında* 「その背中において」が対応している。
- (13) この語形は Toch.B *kārsk-* ‘to throw, spread, shoot’ の Gerundive I の女性形複数主格・斜格形と解釈されるが、語尾 *-lyana* は Peyrot (2008: 117-119) によって後期トカラ語 B の言語特徴と見做されている。なお、後続する *yölänjö* は ‘rest’ という語義が知られており、この語義で対応するならば、*kāršälyana* との対応関係には問題がある。
- (14) 初出であるが、動詞 *kutk-* ‘to give substance to, incarnate’ の使役形現在に属する形式と考えられる。ただし、文脈の欠落により語形を確定することはできない。
- (15) トカラ語 B の Gerundive より派生された抽象名詞に後置詞 *warñai* ‘beginning with’ が附された形式であり、後続する *tutmak* が *tut-* ‘to seize, grab’ の動名詞と理解されることから、動詞 *enk-* ‘to take, seize’ の Gerundive II から派生した抽象名詞 (*enka*)*lñe* が推定される。また、*warñai* に対応する *uladı* は *tutmak* の処格を支配しており、処格名詞 + *uladı* ‘beginning

<sup>66</sup> 橘堂晃一博士より古代ウイグル語 *sig* が漢語「石」の借用語であり、これが Toch.B *śak* に対応している可能性を指摘された。トカラ語 B において度量衡として在証される *cāk* は同じく漢語「石」に由来するが、筆者が把握しているトカラ語 B の世俗文書には *śak* が度量衡の「石」として使用されている例は見られない。或いは、この文書を作成した古代ウイグル語話者がこのようにトカラ語 B を誤解したのかも知れない。

with' と解釈され、先行するトカラ語 B とよく対応している<sup>67</sup>。

- (16) 前後の文脈を欠いており、確実な解釈を与えることは困難であるが、*cämp-* 'to be able to' の現在形或いは接続法一人称複数の形式と推定される。また、先行する古代ウイグル語の形式の内、*tünür* は 'tribe, relative by marriage' と解釈されるかも知れない。
- (17) Skt. *pramatta-* 'intoxicated, careless' の借用形と考えられるが、後続する古代ウイグル語は語義を確定できない。
- (18) Toch.B *yäp-* 'to enter' の Gerundive II から派生した抽象名詞 *yapälñe* 'entering' と考えられるが、第一音節の母音が期待される *-a-* となっていない。また、6 行目 *sparttañe* と同様に、この語形も後期トカラ語 B の音変化である *-lñ- > -ñ(ñ)-* を示している。

## 7. ロシア所蔵トカラ語文献の位置付け

本稿ではロシア所蔵トカラ語断片から、筆者が比定できたものの内、特に重要なものを紹介した。これらの断片の他にも、筆者は荻原 (2009, 2011a) で律蔵文献に属する断片を扱った。これらの断片はいずれも状態が悪く、正確な比定に到達できなかったものも存在するが、若干修正を要するため、以下に言語と共に所蔵番号及び内容を列挙しておく。

SI 2917 30 (= SI B 1.1-30): Toch.B [= Vinaya-vibhaṅga(?)]<sup>68</sup>

SI 2922 11 (= SI B 3 (20)-1): Skt.-Toch.B [= Karmavācanā(?)]

SI 2947 2 (= SI B 19 (30)): Toch.B [= Vinaya]

SI 2947 3 (= SI B 19 (31)): Skt.-Toch.B [= Karmavācanā]

SI 2992 10 (= SI B 97-2): Skt.-Toch.B [= Karmavācanā]<sup>69</sup>

SI 2994 10 (= SI B 115): Toch.B [= Vinaya-vibhaṅga. NP3 及び NP7(?)]

SI 2997 5 (= SI B 125 (3)): Toch.B [= Vinaya-vibhaṅga. Pāt. 32-39]

SI 5871 2 (= SI B rox 2): Toch.B [= Vinaya-vibhaṅga. Aniy.1-NP.1]

また、これらの断片の他にも、比定には至っていないが、言及に値する断片が認められた。即ち、古代期のブラーフミー文字で書かれたトカラ語 B 断片 14 点の存在である。この内数点については残存状態が悪く、古代期トカラ語 B の言語特徴を示すか否か判断できないものも含まれ、また全ての断片に発見場所を示す記載は見られないが、現在知られている範囲内では、このような断片はクチャで発見されていることから、ロシア所蔵のこの種の断片についても同様にクチャで発見された可能性が高い。

筆者が調査した結果をまとめると、ロシア所蔵トカラ語断片は数量的にはドイツ・フランス・イギリスのものに遠く及ばないが、本稿で紹介したように、内容的にはその他の国々

<sup>67</sup> この箇所の古代ウイグル語の解釈については、橘堂晃一博士よりご教示頂いた。篤くお礼申し上げます。

<sup>68</sup> 荻原 (2009) では扱っていないが、当該断片は広律に比定されるかも知れない。

<sup>69</sup> 荻原 (2009) では暫定的に戒本の導入部分と見做したが、後に Karmavācanā とすべきであることに気付き、荻原 (2011a) で修正した。

に所蔵されるものと同様の内容や関連する断片が含まれるだけでなく、年代的にも古代期から後期のトカラ語 B にわたる断片、またソグド語仏典やウイグル仏教との関係を示すものまで確認された。これらの資料は、トカラ語の文献学的・言語学的研究に留まらず、東洋史や中央アジアにおける仏教文献の伝播といった領域にも貢献し得る。ロシア所蔵トカラ語文献は、その他のコレクションに含まれるトカラ語断片だけでなく、サンスクリットやソグド語・古代ウイグル語と言った、その他の言語で書かれた文献をも視野に入れた上で、総合的に研究が行われなければならない<sup>70</sup>。

## 8. 結論

本稿では、筆者の調査に基づいてロシア所蔵トカラ語文献の概略を紹介すると共に、比定に至ったものの内、特に重要な断片を文献学的に扱った。ここで取り上げなかった断片にも、これまでに知られていなかった語形を含む断片なども存在しているが、本稿はロシア所蔵トカラ語文献の紹介と、その中に含まれる重要な断片を利用して、トカラ語文献中にロシア所蔵資料を位置付ける作業を目的としたため、これらについては機会を改めて紹介したい。本稿で見たように、ロシア所蔵トカラ語文献はその他の国々に所蔵されるトカラ語文献と関係を有しており、当該資料全点の画像の公表が期待される。

## 参考文献

- Adams, Douglas Q. (2013) *A Dictionary of Tocharian B, revised and greatly enlarged*. Amsterdam: Rodopi.
- Bernhard, Franz (1965) *Udānavarga. Band I. Einleitung, Beschreibung der Handschriften, Textausgabe, Bibliographie*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Carling, Gerd (2000) *Die Funktion der lokalen Kasus im Tocharischen*. Berlin/New York: de Gruyter.
- Carling, Gerd (2003) New look at the Tocharian B medical manuscript IOL Toch 306 (Stein Ch.00316.a2) of the British Library—Oriental and India Office Collections. *Historische Sprachforschung* 116: 75-95.
- CEToM = <http://www.univie.ac.at/tocharian/?home>. (2018年4月2日閲覧)
- Chavannes, Edouard (1911) *Cinq cents contes et apologues: extraits du Tripitaka chinois, et traduits en français. Tome III*. Paris: Ernest Leroux.
- 慶昭蓉 (2015) 「從 *tuñe* 一詞看龜茲佛教之香華供養」『西域研究』2015年第3期: 43-52.
- 慶昭蓉 (2017) 『吐火羅語世俗文献与古代龜茲歷史』北京: 北京大学出版社.
- Ching Chao-jung and Ogihara Hirotooshi (2010[2012]) A Tocharian B sale contract on a wooden tablet. *Journal of Inner Asian Art and Archaeology* 5 [2012]: 101-128.

<sup>70</sup> 筆者が偶然目についたサンスクリット断片中、SI 2943-5 (= SI B 16-11) a4 及び SI 2950-4 (= SI B 20-23) a1 にはトカラ語 B によるグロスが確認された。この点については、荻原 (2011b: 257, fn. 43) を参照。

- Clauson, Gerard (1972) *An etymological dictionary of pre-thirteen-century Turkish*. Oxford: Clarendon.
- Durkin-Meisterernst, Desmond (2016) Le rôle des acteurs de langues iraniennes. In Michel Espagne, Svetlana Gorshenia, Frantz Grenet et al. (eds.) *Asie centrale: transferts culturels le long de la route de la soie*. Paris: Vendémiaire, 155-165.
- Fausbøll, Viggo (1896) *The Jātaka, together with its commentary, being tales of the anterior births of Gotama Buddha. Vol. I*. Oxford: Pali Text Society.
- Gnoli, Raniero (1978) *The Gilgit manuscript of the Saṅghabhedavastu being the 17th and last section of the vinaya of the Mūlasarvāstivādin. Part II*. Roma: Istituto italiano per il medio ed estremo oriente.
- Hahn, Michael (2007) *Vom rechten Leben: buddhistische Lehren aus Indien und Tibet*. Frankfurt/Main, Leipzig: Verlag der Weltreligionen im Inselverlag.
- Hanisch, Albrecht (2005) *Āryasūras Jātakamālā: Philologische Untersuchungen zu den Legenden 1 bis 15. Teil 1: Einleitung, Textausgabe, Anhänge, Register*. Marburg: Indica et Tibetica Verlag.
- 影山悦子 (2001) 「ヴェッサンタラ・ジャータカの図像について—インドから中国へ—」『古代文化』第53巻第12号: 1-16.
- 笠井幸代 (2006) 「トカラ語より翻訳された未比定のウイグル語仏典註釈書」『内陸アジア言語の研究』XXI: 21-47.
- Kasai Yukiyo (2017) *Die altuigurischen Fragmente mit Brāhmī-Elementen: unter Mitarbeit von Hirotoshi Ogihara*. Turnhout: Brepols.
- Lévi, Sylvain (1933) *Fragments de textes koutchéens (Udānavarga, Udānastotra, Udānālamkāra et Karmavibhaṅga) publiés et traduits avec un vocabulaire et une introduction sur le «Tokharien»*. Paris: Société Asiatique.
- Malzahn, Melanie (2007) Tocharian texts and where to find them. In: Melanie Malzahn (ed.) *Instrumenta tocharica*. Heidelberg: Winter, 79-112.
- Malzahn, Melanie (2013) Of demons and women—TB *yakṣa*- and oppositional feminine forms in Tocharian. *Tocharian and Indo-European Studies* 14: 105-121.
- Maue, Dieter (1996) *Altürkische Handschriften. Teil 1. Dokumente in Brāhmī und Tibetischer Schrift*. Stuttgart: Franz Steiner.
- Maue, Dieter (2015) *Altürkische Handschriften. Teil 2. Dokumente in Brāhmī und Tibetischer Schrift*. Stuttgart: Franz Steiner.
- 森安孝夫 (2004) 「亀茲国金花王と硃砂に関するウイグル文書の発見」三笠宮殿下米寿記念論集刊行会(編)『三笠宮殿下米寿記念論集』東京: 刀水書房, 703-716.
- 中川原育子 (2011) 「キジル第81窟のスターナ太子本生壁画について」『名古屋大学文学部研究論集・史学』57: 109-129.
- Ogihara Hirotoshi (2009) *Researches about Vinaya-texts in Tocharian A and B*. (Unpublished doctoral dissertation. Paris: École Pratique des Hautes Études, 2009).

- 荻原裕敏 (2011a) On the Poṣatha ceremony in the Tocharian Buddhist texts. 『龍谷大学佛教文化研究所所報』 35: 22-28.
- 荻原裕敏 (2011b) 『阿蘭那經』に比定された *SHT* 所収梵語断片について『東京大学言語学論集』 31: 235-268.
- 荻原裕敏 (2013) 「利用漢訳仏経研究出土胡語仏教文献—以龜茲語文献中所見《求妙法王》故事為例」『国学的伝承与创新』中国人民大学国学院(編)上海: 上海古籍出版社, 1121-1139.
- Ogihara Hirotoishi (2014) Fragments of secular documents in Tocharian A. *Tocharian and Indo-European Studies* 15: 103-129.
- 荻原裕敏 (2015a) 「俄国国立艾爾米塔什博物館所藏庫車、錫克沁壁画題記」『西域文史』第十輯: 33-42.
- Ogihara Hirotoishi (2015b) The transmission of Buddhist texts to Tocharian Buddhism. *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 38: 295-312.
- Ogihara Hirotoishi (2016a) Sanskrit-Tocharian B bilingual *Udānavarga* fragments kept in the Russian Collection. In: Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences (ed.) *Sergey Fedorovich Oldenburg (Proceedings of the international conference: Scholar and Academic Research Organizer)*. Moscow: Nauka, 223-235.
- 荻原裕敏 (2016b) 「ベゼクリク第 20 窟誓願図のトカラ語題記について」『東京大学言語学論集』 37: 191-216.
- Ogihara Hirotoishi (2016c) Remarks on fragment B431 of the Berlin Turfan collection. *Tocharian and Indo-European Studies* 17: 133-151.
- Ogihara Hirotoishi (2018) A newly identified Kuchean fragment of the *Hariścandrāvadāna* housed in the Russian collection. *Written Monuments of the Orient* (Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences) 2018(1): 35-54.
- 荻原裕敏 (forthc.) 「旅順博物館所藏吐火羅語殘片的特色及語言文献学分析」In: 旅順博物館(編)『「新疆出土文献与絲綢之路」国際学術研討会(2017年11月5-7日・於中国旅順)論文集』.
- Ogihara Hirotoishi and Ching Chao-jung (2016) SI 3656 and other Tocharian tablets related to the Kizil grottoes in the St. Petersburg Collection. *Written Monuments of the Orient* (Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences) 2016(2): 44-67.
- 荻原裕敏・慶昭蓉 (2017) 「浅論庫木吐喇窟群区第 79 窟漢—婆羅謎—回鶻三文合璧榜題」『敦煌吐魯番研究』第十七卷: 291-315.
- Peyrot, Michaël (2008a) More Sanskrit—Tocharian B bilingual *Udānavarga* fragments. *Indogermanische Forschungen* 113: 83-125.
- Peyrot, Michaël (2008b) *Variation and change in Tocharian B*. Amsterdam: Rodopi.

- Peyrot, Michaël (2016) The Sanskrit Udānavarga and the Tocharian B Udānastotra: A window on the relationship between religious and popular language on the northern Silk Road. *Bulletin of the School of African and Oriental Studies* 79: 305-327.
- Pinault, Georges-Jean (1990) Compléments à l'Udānāñkāra et à Udānastotra en koutchéen. In Haneda Akira (ed.) *Documents et archives provenant de l'Asie centrale*. Kyoto: Dohosha, 51-69.
- Pinault, Georges-Jean (1998) Economic and administrative documents in Tocharian B from the Berezovsky and Petrovsky Collections. *Manuscripta Orientalia* 4/4: 3-20.
- Pinault, Georges-Jean (2016a) The Buddhastotra of the Petrovskii collection. *Written Monuments of the Orient* (Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences) 2016(1): 3-20.
- Pinault, Georges-Jean (2016b) Glossary of the Tocharian B Petrovsky Buddhastotra. *Tocharian and Indo-European Studies* 17: 213-247.
- Sander, Lore (1968) *Paläographisches zu den Sanskrithandschriften der Berliner Turfansammlung*. Wiesbaden: Franz Steiner.
- Sander, Lore (2005[2009]) Remarks on the formal brāhmī script from the southern Silk Route. *Bulletin of the Asia Institute* 19: 133-144.
- Sieg, Emil (1952) *Übersetzungen aus dem Tocharischen II, aus dem Nachlass hg. v. Werner Thomas*. Berlin: Akademie-Verlag.
- Speyer, Jacob Samuel (1895) *The Jātakamālā, or Garland of birth-stories of Āryasūra*. London: Frowde.
- T = *Taishō Tripitaka*.
- Thomas, Werner (1966) Tocharische Udānastotras der Bibliothèque Nationale in Paris. *Zeitschrift für Vergleichende Sprachforschung* 80: 163-181.
- Thomas, Werner (1989) *Probleme der Übertragung buddhistischer Texte ins Tocharische*. Mainz: Akademie der Wissenschaften und der Literatur.
- TITUS = *Thesaurus Indogermanischer Text- und Sprachmaterialien*, see <http://titus.fkidg1.uni-frankfurt.de/texte/tocharic/tht.htm>. (2018年6月30日閲覧)
- TochSprR(B) II = Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1953) *Tocharische Sprachreste. Sprache B. Heft 2. Fragment Nr. 71-633. Aus dem Nachlass hrsg. von Werner Thomas*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- VJ = Émil Benveniste (1946) *Vessantara Jātaka*. Paris: P. Geuthner.
- 八尾史 (2013) 『根本説一切有部律彙事』東京: 連合出版.
- 吉田豊 (2001) 「中央ユーラシア地域に伝播した仏典の研究」『古典学の再構築 第1期研究成果報告』神戸, 71-78.

Yoshida Yutaka (2013) What has happened to Suḍāśn's legs? In Tochtaš'eva, S. R. and P. B. Lurje (eds.) *Commentationes iranicae: сборник статей к 90-летию Владимира Ароновича Лувинца*. Saint-Petersburg: Nestor-Historia, 398-414.

[追記]

荻原 (2016b: 191-201) にて、筆者はベゼクリク石窟第 20 窟誓願図第 5 面のブラーフミー文字題記 *śīlaśānte śīlavānde* は、*śīlavānde* がトカラ語 B のみに在証され、ブラーフミー文字ウイグル語資料及びウイグル人によるサンスクリット題記に見られる形式が *śīlavanti* 或いは *śīlavāndi* であるため、ウイグル語ではなくトカラ語によって「持律比丘 *Śīlaśānte*」と解釈される点を論じたが、この題記がウイグル語か或いはトカラ語かという点は、ウイグル人によって書かれたブラーフミー文字資料に、*śīlavānde* の如く語末に *-e* を有する語形が在証されるか否かに最終的な判断を俟ちたい旨の留保をつけておいた。

橘堂晃一「敦煌石窟ブラーフミー文字題記銘文集」[松井太・荒川慎太郎(編)『敦煌石窟多言語資料集成』東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017: 163-198] は、敦煌石窟に在証されるブラーフミー文字題記を体系的に紹介しており、特に pp. 171-173 では M148 Brh 02: *ādityasena śīlavānde na // ha āgata vandātu* 「アーディティヤセーナ律師が……来た。礼拝する。」を扱い、欠落部分の *na // ha* を *ta(syā)ham* と推定している。橘堂氏はこの推定によっても当該題記を十分には解釈し得ない点を断った上で、この題記に在証される *śīlavānde* を根拠に、上記ベゼクリク石窟第 20 窟の題記が、伝統的にトカラ語形式で受容したサンスクリット語彙をサンスクリットとして記そうとしたものであった可能性を指摘する。筆者は、ベゼクリク石窟の題記が、実際にはトカラ語形式に由来する語形をウイグル人僧侶がサンスクリットと誤解して書いたものである可能性を否定しない。ただし、橘堂氏が紹介する題記は *ādityasena-śīlavāndena (i)ha āgata vandātu* 「アーディティヤセーナ律師と共にここに来た (3sg.)。礼拝すべきである (3sg.)。」のように、*śīlavānde* を主格ではなく、後続する *na* と共に具格 *śīlavāndena* と解釈すべきであるため<sup>71</sup>、上述のような可能性を支持する材料たり得ないと考えている。

<sup>71</sup> 筆者の解釈が正しければ、この題記はアーディティヤセーナ律師ではなく、彼の同行者によって書かれたと考えられる。注釈によれば、同窟に残存するアーディティヤセーナ律師の手になる他の題記よりも本題記はやや乱雑に書かれていると言い、この点は別人によって書かれた可能性を支持するかも知れない。なお、同書 224 頁で紹介されている慈氏塔に在証されるチベット語題記では、この語の末尾が解読不能とされており、有効な材料とはならない。筆者が把握している限り、ウイグル語資料には *śīlavānde* という語形は未だに在証されていない。



# Remarks on the Tocharian Manuscript Remains Housed in the Russian Collection

Ogihara Hirotoshi

**Keywords:** Tocharian Buddhist literature, (Mūla-)Sarvāstivādins, «*Vessantara-jātaka*»

## Abstract

This paper provides a brief overview of the Tocharian manuscript remains housed in the Russian collection which are little known in the scholarly world. The paper includes a philological interpretation of six fragments whose provenience is unknown, although my identification alludes to that for two of the fragments. The identification of the fragments analysed here is as follows:

SI 2943-3: *Buddhastotra*

SI 6375-3: *Udānavarga*

SI 2997-2: *Udānastotra*

SI 2962-2 + SI 2998-8: *Vessantara-jātaka*

SI 3753: History of Kuchean Buddhism

It is noteworthy that the morphological features of SI 2962-2 and SI 2998-8, which are joined to each other, indicate that they belong to the same manuscript as B370 in the Berlin Turfan collection, which was identified as part of the *Vessantara-jātaka* in TochSprR(B) II. This affiliation suggests that like the latter fragment, SI 2962-2 and SI 2998-8 were also discovered in Murtuq. Together, these fragments are the first Tocharian specimen that can establish a link between the Berlin and Russian fragments. In contrast to A70 in the Berlin Turfan collection, which exhibits strong similarities to the *Vessantara-jātaka* narrated in the *Jātakamālā*, the Tocharian B version of this story cannot be attributed to any known Indic texts, but rather most often exhibits similarities with the Chinese and Sogdian versions. This suggests that varying versions of this story were transmitted to the Northern rim of the Tarim Basin.

Another point that deserves mention is that the recto side of SI 3753 that is written in Old Uyghur in the Brāhmī script appears to narrate the history of Kuchean Buddhism, since it mentions Kucha and an Arhat named Candrasasu, also attested in B418, now in the Berlin Turfan collection, and discovered in Murtuq. Although the damaged status of these two fragments does not permit us to reconstruct the story narrated in them, it could be supposed that the history of Kuchean Buddhism composed in Tocharian B would have been transmitted to Old Uyghur Buddhism. In this regard, eight Tocharian B and Old Uyghur bilingual fragments currently maintained in the Russian collection will be also introduced.

(おぎはら・ひろとし 京都大学白眉センター/文学研究科)